
見つめる先にあるのは…

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見つめる先にあるのは：

【Nコード】

N7174D

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

大学に通う主人公が、自分の身の回りに起こる色んな事で悩む気持ちや想いを描いたものである。そして、主人公が大学内で起こった痴漢事件を解決したことも描いている。

夢をくれた人

十一月中旬、風が冷たく吹く中、私立大学に通う二葉宏明は大学内にある図書館へと向かっている最中だった。目的はレポートを書くためだ。

昼休みが終わり、三限目の授業をとっていない宏明は、翌日の一限目に提出しなければいけないレポートを、あともう少し書き加えたいと思ったのだ。

図書館に入ると、心地よいくらいの暖房が入っている。宏明はレポートに関する本を三冊手に取り、隅の席へ座ると軽いため息をついた。そして、図書館全体を見渡す。

図書館には、宏明のようにレポート提出のため、レポートを書いている人や、授業の予習や復習をしている人もいる。そんな人達に後押しされてか、宏明もレポートに取りかかる。

文学部の国文科にいる宏明は、国語の教師を目指している。国語の教師を目指し始めたのは、中学二年の秋からだった。

当時、四回生だった男性の大学生が、宏明と同様、国語の教師を目指していた彼は、宏明のクラスに教育実習に来て、後に宏明にとって大きな存在となった。

教育実習の最終日、学級委員をやっていた宏明と一緒にやっていた女子に、“この二週間ありがとう。このクラスは不良が多くて大変だったけど、君たち二人がいてくれたから、安心して教育実習を終えられた。君たちのこれからの人生、楽しいことばかりじゃない。辛いことや嫌なことがたくさんある。それらから逃げたら負けになるから…”と、言ってくれた言葉が、宏明の心の中に今でも残っている。

もし、あの時、何も言ってもらえなかったら、教師を目指そうとは思わなかった。別の職業を選んでたかもしれないし、文学部には入ろうと思わなかったのだ。

たまに教育実習に来てくれた彼と逢いたいと思ったこともあったが、大学名はおろか住所や電話番号も聞いてはいないのだ。聞いたところで、教えてはもらえないというのが、もっともな理由だろう。

いつか逢えると思い、その日を待っているのだが、なかなか再会が出来ないというのが、実情だ。再会が出来る日が来ると思いながらも、宏明の心のどこかで、もう二度と再会は出来ない、来ることはないと半ば諦めているというのも事実である。

もし、再会が出来るのであれば、宏明は伝えたいことがあるが、それも言えそうにないと考えている。一番、再会したい人に再会出来ない。そんな矛盾を感じながら、今日まで過ごしてきた。

なんでも叶うことが出来る魔法があれば…と思うことが多いこのごろである。しかし、なんでも簡単に願いが叶ってしまえば、何一つ努力はしなくてもいい。

なんでも叶ってしまえばと思う反面、すぐに自分自身の中でその考えを否定してしまう。

そんな思いをもどかしく思うもう一人の宏明がいた。

大学の授業が終わり、オレンジ色の夕焼けが空いっぱいひろがっている。

宏明は彼女の西野紀美と一緒に、四限目の授業の教室から校舎の外へと出てきたところだ。

「宏君、今日はバイト？」

「今日はバイトないんだ。紀美は？」

「私もない。家に帰っても何もすることないんだ」

宏明よりも二十八cmも低い紀美は、笑顔で答える。

「じゃあ、晩ご飯でも食って帰る？」

「いいよ。宏君、何かあった？」

急に紀美は真顔で聞いてきた。「何かって…？」

「時々、帰りたくなさそうな顔をする」

「そんなことないと思うけど…」

そう言った宏明には、思い当たる節があったのだ。だけど、人には言うべきことではないと思い、ずっと心の中に隠していたのだ。

「私の気にしすぎかもしれないし…ごめんね、変なこと聞いちゃって」

「ううん、いいよ」

内心、ホッとする宏明。

「何食べる？ 私、駅前のパスタ屋さんがいいなあ…」

紀美はさっきと違う明るい口調で言う。

「そこ行こっか？ オレ、ついでに買い物もあるんだけどいいかな？」

宏明の来たと、うなづく紀美。そんな会話をしているうちに、バイクの駐輪場に着いた。

ヘルメットが宏明の分しかないため、駅までの十五分間の道のりを、二人は歩く。

近頃は学内でしか二人で歩くというけとはしない。

デートは久しぶりといえば久しぶりだ。

デートといっても、毎日、学校で会っているため、別にしなくてもいいくらいだ。

二人は駅前に着くと、宏明の買い物を終えると、紀美が行きたいと言ったパスタ屋さんへと向かった。

そのパスタ屋さんには、一ヶ月半前に出来たばかりの店で、インテリアに凝ったいい雰囲気だ。店内には宏明達より少し上の人や年輩の人が数人いる。

二人は注文すると、改めてホッとした。

「ねえ、宏君、明日提出するレポートは書けたの？」

「うん。書き直す前よりも詳しく書いてしまったけどな」

宏明は自信満々に答えた。

「気合い入ってるじゃない？」「当たり前だろ？ 教職の授業だし、オレはヤル気十分だ」

「教師か…。でも、なんで、国語なの？」

紀美はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「中二の時に教育実習に来た人が、国語は教師を目指したっていうのもあるけど、国語は答えが一つじゃないってわかったからだ」

「確かにね」

紀美も同感する。

「それまで国語は苦手だったけどその人が教育実習に来てくれたおかげで、色々なことを学んだってところかな」
頬づえをついて言う。

「じゃあ、その人が宏君の人生を決定づけたっていうこと？」「そういうこと」

うなずきながら答えた宏明。

「その人に逢いたいけど逢えない。伝えたいこともあるのに伝えられない。人生ってこんなものかなって思ってるよこだ」

そう言うと、宏明は教育実習に来てくれた大学生の顔を思い出していた。

——今頃、教師になってるかな。志が高い人だったから、なんとかしてでも叶えてるだろうけどな。

「教師の夢、ちゃんと叶えないとね」

紀美は宏明を見つめて言った。「その人が教育実習に来てなければ、文学部に入ろうなんて思わなかったんだから…」

「まあな。教師になるっていう夢をもらったんだしな」

宏明は自分が教壇に立った時のことを想像していた。

あの頃——中学二年の時は自分が将来、何になるのか、自分の夢というものがなかった。

一度、小学生の時に「シェフになりたい」と思ったこともあったが、中学に上がる頃には、その夢も自分自身の中から消えていた。そのことに気付いた時、宏明は“シェフになりたい”と思ってたけど、そ

んなになりたいわけじゃないんだ”と思った。そして、自分の夢が見つからないまま時は過ぎ、あの教育実習の大学生との出逢いがあった。中肉中背で爽やかなスポーツタイプで、本当に教師を目指していますという雰囲気的大学生だった。

宏明にとって、初めての教育実習に来る大学生だったが、自分の夢のためにこんなに頑張れるんだという希望をもたらせたのだ。

「宏君、私に何か出来ることがあったら言ってね。話を聞くぐらいしか出来ないけど…」

紀美は照れを隠して言った。

「ありがとう」

そう礼を言った後、頼んでいたパスタが運ばれてきた。

紀美とパスタ屋で食事をして、三十分ほど話をしてから店を後にした。そして、二時間カラオケに行った後、お互いの家路に着いた。

宏明が家に戻ると、午後九時半近くだった。

台所に行くと、冷蔵庫からお茶が入っている入れ物を取り出し、マグカップへと注いだ。

宏明はお茶を一口飲むと、マグカップを見つめた。

「あら？ 宏明、帰ってきてたの？」

母が二階から降りてきて、宏明に声をかけた。

「あ、うん…」

「ところで今は事件は起こったりはしてないの？」

母は椅子に座りながら聞いてきた。

事件というのは、宏明は自分が遭遇した起こった事件を解決したことが何度かあるのだ。そのことは家族や友達は当然知っている。

「今のところはない」

宏明も母の向かいに座ってから答えた。

「事件ばかり解決してないで、大学をちゃんと卒業して、いい会社に入ってくれないと…。フリーターなんてされると、大学に行かせた意味もないし、お金がもったいないんだから…」

母は当たり前のように言う。

「色んな企業に面接に行けば、採用してくれるはず」

宏明は母に話を合わせる。

母は宏明の夢を知らない。

「さっ、早くお風呂に入って寝なさい」

「わかった」

宏明は返事だけすると、荷物とマグカップを持ち、自分の部屋へと向かった。

部屋に入ると、荷物とマグカップを机に置き、ベッドに寝転んだ。

——いい会社に入ってくれないと…、フリーターされると困る、か…。まあ、親からするとそうだろうな。でも、オレは教師になりたい。何がなんでも叶えてみるけどな。

宏明は母が言った言葉を胸に留めておきながら、自分の夢を叶えるという決意をした。

——途中で挫折するかもしれないけど、やるだけやってみるか。もし、叶わなければ、夢を追いかけてたつていう証があればいいんだけど…。

天井を見つめながらそう思う宏明。

教師の夢は、母以外にも父や二人の兄も知らない。つまり、家族は誰一人も知らない。

別に言うのが嫌だというわけではない。ただ、宏明の中で家族に否定されるのではないかと思う気持ちが強いのだ。

二人の兄は、自分の夢を実現している。二人の兄が夢を実現しているからといって、自分の夢が必ずしも実現するとは限らない。自分に関わる全ての人に、“教師になりたい”と言ったところで、夢は実現しない。

宏明はそのことを知っているからこそ、家族には言えないままなのだ。

宏明の夢は紀美と紀美の友達一人と高校時代からの友達の三人しか知らない。

——教師の夢、家族に言ったほうがいいかな。今から伝えることは

遅くはないけど…。

一瞬そう思った宏明だが、もう少し後から伝えようと思い直した。

「あの人に再会したい…」

ボソッと独り言のように呟くと、風呂へと向かった。

意外な再会

紀美とパスタ屋で食事をしてから十日がたった。

宏明が提出したレポートの教科、教職の授業の教授から、「いい出来のレポートだった」と言われた。そう言われた宏明は「そんなに大層なレポートじゃないです」と、控えめに言ったのだった。

宏明にとって、レポートを書くのはそんなに苦ではない。むしろ、好きなほうだ。難しい課題のレポートもあるが、なんとかクリアしている。

「ヒロ、レポートの件、良かった」

教職の授業の教室に向かう途中、高校時代からの友人の相川茂が言った。

「まあな。茂はなんで教職の授業取ってるんだよ？」

「職に就けたらいいんだけど、教師にもなりたいてって気持ちもあるもんだからな。ヒロみたいにちゃんとした理由はないんだけどさ」

「理由はなくてもいいんじゃないか。教えたいたい気持ちがあれば十分だよ。まあ、教師になることは簡単な事じゃないけど、教員免許は持っても損はないんだしな」

宏明がそう言うと、茂は少し不安な表情を浮かべた。

「どうした？」

「自分に生徒を教えることが出来るのになって…」

「大丈夫だって。オレもそんなもんだし、いつも悩んでばかりだ」

宏明も自分の中にある不安な気持ちを言葉にだす。

「自信過剰のヒロがそんなことを言うなんて珍しいな」

苦笑しながら言う茂。

茂を見て、宏明も苦笑する。

「オレだって自信ない時だってあるぜ」

「そりゃあ、そうだな」

茂は胸を撫で下ろす。

茂にとって、宏明はいつも自信があるようにしか見えない。試験やスポーツなど全てにだ。

「茂にはそう見えても仕方ないか…」

ボソッと呟く宏明。

茂はえっと声をもらして、宏明のほうを見る。

「自信過剰にしてないと、自分が壊れそうだな」

「壊れそう…？」

茂が首を傾げると、校内にチャイムが鳴り響いた。

「続きは授業の後だな」

「オウ！」

二人は教室に入ると、隣同士に座った。

「で、さっきの話の続きなんだけど…」

授業終了後、教室から出てすぐに茂が聞いてきた。

「弱く見せるのはオレらしくないって思ってたさ」

「確かにそれはあるかもな」

茂は同感したように頷く。

「いつでも自信過剰にしていたんだ」

「あまり強く見せようとするなよ。まあ、オレもヒロのこと気付いてやれなかったのは悪いとは思うけど…」

茂はすまなそうに言った。

そんな茂を見て、宏明はふっと笑った。

「気にするな。今まで相談しなかったオレも悪いんだし…」

「そう言ってもらえると嬉しい」

すまなそうな表情から気が楽になった表情をする茂。

「それにしても、ヒロは自分を持ってるところが凄い。意見ははっきり言うし、高校の時は部活や委員会もしっかりこなしてたし…」
茂は自分を比較して言う。

「オレと比較するなよ」。茂にもいいところたくさんあるし、オレ

にはないものがある」

「それでもオレと何かが違うんだよな」

自分と宏明は別なんだという口調の茂。

そんな茂に呆れる宏明。

「人それぞれってことだ。なっ？」

茂の肩を軽く叩いた宏明。

「ヒロと茂！」

背後から女性の声で呼ばれた二人は振り返る。

「おっ、京子！ ノンちゃんは一緒じゃないのか？」

「うん。ノンちゃんは英文科にいる友達とお昼食べるって言ってたから…」

地方から下宿して大学に通う水木京子は、息を切らしながら答えた。

「ふーん…せっかくだから三人で学食行こうか」

宏明はつまらなさそうに言った。

「何よ？ つまらなさそうに…」

京子は頬をふくらます。

「あ、いや、別に…」

「ノンちゃんがいらないからつまらないっていうのね？」

「そういうわけじゃ…」

「じゃあ、どういうわけなのよ？」

「だから…それは…つまりだな…」

あたふたしながら言葉に詰まる宏明。

「まっ、いいわよ。早く学食行こっ！」

そう言うと、京子は学食へと歩きだす。

そして、三人は学食で食事をしながら、さっきの宏明と茂のやり取りを、京子に話した。

「茂の言うとおり、ヒロは凄いと思う」

茂の意見に同意する京子。

「そうか？ オレは人に凄いて言ってもらえる人間じゃないって…」

頭をかきながらの宏明。

「でも、ヒロが中学と高校の時に生徒会にいたなんてねえ…」「中学は書記をやってたんだ。本当は副会長やりたかったんだけど、友達がどうしてもやりたいうて言うから譲ったんだ。高校の時は、二年後期が副会長で、三年前期が会長だ」

宏明は自慢気に言う。

「会長なんてよくやるよ」

「その上、部活もやってたしな」

「陸上部だっけ？」

「うん。やりたいことやっとかないと後悔するのが嫌なんだ」宏明は力強く言った。

「ヒロは意思が強いね。これって思ったらこのままいくんだもん」宏明を尊敬の目で見る京子。

京子だけじゃない。茂や紀美、学校の教師や同級生など回りの人間が、いつも宏明には感心させられていた。

宏明が生徒会に入りたいて思ったのは、二人の兄の影響だ。

中学時代、一番上の兄は文化委員長、二番目の兄が美化委員長をやっていた。そんな兄を見ていて、“自分も生徒会に入りたい”と思い始めた。

中学に入ってからまずは一年の間、体育委員に入った。そして、二年からは学級委員をやり始め、後期に書記に立候補をし、見事当選したというわけだ。

高校時代、引き続き学級委員になり、生徒会に入ったというわけだ。部活もやりながらだったので、中学と高校の六年間、辛い事やしんどい事もあったけど、すべて前向きに変えてきたのだ。

学校の成績表も中の上で、よく出来たほうだった。友達も小学校の時から多く、高校に入ると何人かの女友達と呼べるものも出来た。学生生活の中では、充実した日々を送っていたが、一つだけ充実していないものがあつた。それは家の中での宏明だ。

学校から帰ると、いつも疎外感に襲われていた。食事の時も旅行の

時も、家族の前では自分をだすことが出来ずにいた。

宏明の両親は、二人の兄に期待を持ち、宏明には無関心なくらい見向きもしない。全てにおいてそうではないが、宏明の心はいつも両親の愛を感じられずにいた。そのせいか、自分は二葉家の息子なのかと思ったこともあったが、そんなことはないと思い直すことも度々あった。

――親父やお袋は、オレのことをどんな風に見てて、どう思ってるんだろう？

学食の窓の外を見つめ、ふと思う宏明。

――もう一度、高校時代に戻りたい。中学時代も頑張ってたけど、高校時代のほうがよりいっそう頑張ってたような気がする。

宏明の脳裏には、高校時代の思い出の数々が浮かんだ。

一番の思い出といえば、体育祭の応援団だ。三年間やっていて、三年には応援団長を努めていた。

さすがに応援合戦の時は緊張したが、宏明にとってはよく出来たと今でも思っている。応援団に三年間いたことは、宏明にとって貴重な体験となった。

「私もヒロミみたいに意思が強くなりたいな。私、飽き性だから、何やっても続かない」

京子は宏明をまじまじと見つめて言った。

「でも、書道は続いてるじゃねーか」

「書道だけだもん」

「いつからやってたんだっけ？」

茂が聞いてくる。

「小一から高三までの十二年間。今でもサークルで入ってるけどね」
笑って答える京子。

「そっか。オレもバスケだけだよ。唯一、続いたことって……。もつとやりたいことやっておけば良かった。やりたいって思っても、行動には移さなかったからな」

後悔しているような口調の茂。それは京子も同じである。

「そうそう。他の人がやったほうがいいんじゃないかって思うもんね」

京子はしみじみ言う。

「一つでもやりたいことがあったらいいと思う。やりたいことを夢中になってやることはいいいことだしな」

二人を横目に言う宏明。

「そうよね。さあ、もうすぐで昼休みも終わるし行こう」

京子はトートバックを肩にかけ、トレーを持ち立ち上がる。

宏明と茂も立ち上がり、京子の後を追いかける。

「ノンちゃんと三限目の授業の教室の前で待ち合わせしてるんだ」
学食を出て、一步前に歩く京子は二人のほうを見て言う。

「英文科に友達がいるなんて知らなかった」

「ヒロでもノンちゃんのこと知らないことあるんだ？ 私、てつきりノンちゃんのこと全て知ってるんだと思ってた」

宏明は紀美のことならなんでも知ってるもんだと思い込んでいた京子。

「付き合ってるからって紀美のこと全て知ってるわけではないさ」

「でも、女の子とわけじゃないかもな」

茂は冗談混じりで言う。

それに対して、不安な表情をする宏明。

「嘘だよ！ 冗談だって！」

慌てて否定する茂。

「当たり前だろ？ 紀美は他の男と遊ぶわけないだろ」

さっきの不安な気持ちを打ち消すように、自分自身へと言った宏明。

「そうよ。ノンちゃんはそんな子じゃないもん」

京子も宏明の肩を持つ。

「京ちゃん！」

三限目の教室に着く前に、紀美が京子と呼ぶ。

「あっ、ノンちゃん！」

「三人の姿が見えたから…」

小走りで三人に書けよってくる紀美。

「ヒロが男の子なんじゃないかって気にしてたわよ」
京子は紀美の腕を肘でつつきながら言った。

「まさかぁ。高校の時の友達で女の子よ」

紀美は笑顔で答える。

「本当は外大受けたんだけど落ちちゃって…」

「そっか。ヒロ、これで不安解消だな」

「オレは不安になんか…」

「ウソつけ！ 不安な表情をしてたくせに…」
いたずらな目をする茂。

「そ、それは…」

動揺する宏明を見て笑いだす三人。

「ヒロらしくない！！」

「そんなに笑うことないだろ？」

頬を赤くする宏明。

「宏君、そんなに心配してくれたんだ」

「あ、うん、まあ…」

頭をかきながら頷く宏明。

「ノンちゃん、ヒロに心配されて羨ましいじゃん？」

「そんなことないよお」

「それだけ仲が良いってことか」

茂は宏明と紀美を見て言った。

その日の放課後、宏明は校内の書籍部によった。前から読みたい本があった、その本を買うためだ。

今日は紀美がバイト、茂がバスケット部、京子が書道のサークルがあり、宏明一人だけ予定がないのだ。

書籍部を出た後、次はどこへ行こうかと考えていた。
最近、あまり家に帰りたくない気分なのだ。

バイクの駐輪場に向かう途中、「二葉君…?」

背後から男性の声で、宏明を呼ぶ声が聞こえた。

宏明が振り向くと、背広を着た一人の男性が立っていた。

最初はわからずにいた宏明だったが、昔の記憶と合致した。

「吉田先生ですよね…?」

「そうだよ」

宏明が名前を呼んだ相手は頷いた。

「二葉君、この大学に通ってたんだ?」

「はい、そうなんです」

「そうか…」

吉田と呼ばれた男性は、宏明から大学の校舎に視線を移した。「吉

田先生、なんでここに…?」

「僕もこの大学の文学部にいたんだ」

「オレも文学部にいるんですよ」

「もしかして、国文科だったりする?」

「そのもしかしてです」

宏明ははっきりと答える。

「国語の教師を目指しているのかい?」

「はい、そうです」

「じゃあ、僕と一緒にだな」

「そうですね。吉田先生、これから大学に…?」

「いいや。用が終わって帰るところなんだ。そうだ! 今から夕食、

一緒にしないか?」

「いいですよ。オレも用がなくて、そのまま家に買えるのも気が進まなかったとこなんで…」そう答えると、宏明はバイクを取りに行き、この前、紀美と行った駅前のパスタ屋さんへと行った。

二人は向かい同士に座ることになった。

「ところでなんで国語の教師を目指したんだい?」

「実は吉田先生が憧れで…」

照れながら答える宏明。

「そうなのか。嬉しいな」

吉田先生は微笑んで言った。

「吉田先生は今は…？」

「ちゃんと教師になってるよ。私立の高校でね。教師になったのは、大学を卒業して一年後だったけどね」

「一年後…？」

宏明は首を傾げた。

「うん。四回生に教員試験を受けたんだけど、落ちてしまったね。翌年、受け直したってわけさ」

「そういうことだったんですか…」

そう呟くと、宏明は水が注がれているグラスに目をやった。

「今日は用があって大学に…？」

「終礼が終わってから、四回生の時にお世話になった教授に会いに来たんだ」

吉田先生はゆっくりとした口調で答えた。

宏明の脳裏には、吉田先生が教育実習に来ていたことが蘇った。

「それにしても、二葉君が国語の教師を目指してるなんて…。僕が来たお陰かな？」

「そうですね。オレはあの時、夢というものがなくて…。吉田先生が来てくれたことで、夢が見つかったんです」

宏明は吉田先生の瞳をまっすぐ見つめ言った。

「そう言ってもらえると光栄だな」

「そういえば、吉田先生っていくつになられたんですか？」

「もう三十歳だ。三年半前に結婚して、三歳の息子と四ヶ月の娘の四人家族だ」

「そうなんですか」

「…なんか、結婚してるイメージはないな。」

答えながら、宏明は心の中でそう思っていた。

「僕の嫁も家庭科の教師だったんだ。結婚した翌日の三月に退職したけどね」

「職場結婚ってわけですね」

――結婚か……。今のオレには想像もつかないことだな。

「あの時の二葉君のクラスは、不良ばかりだったわけ？ 担任が注意しても聞かなかったのに、僕なんか全くだったよな。僕、二日目でヘコんでたんだよな、実は……」

衝撃的な告白をした吉田先生。「そんなに大変でした？」

「そりゃあ、大変だったさ。クラスの半分は不良だったな。ていうか、全校生徒の不良の数が凄かったな」

吉田先生は当時の事を思い出していた。

確かにそう言われてみればそうだ。

教師に暴言や途中で授業が中断することは、日常茶飯事であった。高校生のバイクの後ろに乗り暴走して、警察に補導されることも度々あった。

そして、宏明が二年の冬に事件が起こった。

宏明と同じ学年で同級生の不良の男子生徒が、違う中学の男子生徒に、ナイフで腕を刺してしまったのだ。不良の男子生徒が腕を刺した理由は、「自分の顔を見て笑った」というものだった。結局、その不良の男子生徒は、少年院へ送られることになってしまった。

そんな学校を少しでも改善したくて、生徒会に立候補した宏明だった。

「……そうか。そんなことがあったんだな」

吉田先生はため息まじりで呟いた。

宏明は少年院に送られた男子生徒の話をしたのだ。

「不良といえどもそんなことをするはずがないって思ってたけど、ちょっとしたことでもキレてしまったんだな」

「ええ……。校内全体が驚きの一色でしたよ」

校長が全校集会で全て包み隠さず話してくれた時の表情を思い出していた。気丈としていたが、少し疲れた表情をしていたのだ。

「中学の出来事は目まぐるしく起きたから、三年間あっという間でしたよ」

宏明は紙をかきあげながら言った。

「だろうね。二葉君、国語の教師になることは大変だろうけど頑張ってくれよ。いつでも応募してるからな」

吉田先生は力強く宏明に伝えた。

「ありがとうございます。頑張ります」

「サークルには入ってるのかい？」

「いいえ、何も入ってません」 「今、三回生だったよな？」

吉田先生の質問に、頷く宏明。 「そうか。学生生活も一年半ほどだ。四回生になると、就活で忙しくなるから、今から少しでも遊べばいいよ。もちろん、やりたいこともね」

「やりたいことがあるといえはあるんですけどね」

宏明は遠回しに言った。

「それは…？」

「前に痴漢騒ぎがあつて、その犯人を探し当てたのがオレなんです。そしたら、大学内のそのことが広まって、色んな相談を受けるようになって…。今では殺人事件の犯人を当ててるほどで…」

「そうなのか？」

宏明の言葉に、吉田先生は驚いている。

「教師を辞めて、警察官を目指したほうがいいんじゃないのか？」

「よく言われるんです」

「二葉君にそんな実力があるとはねえ…」

吉田先生は水を一口飲んでから言った。

「たまたまですって…」

宏明は笑って言ったが、痴漢騒ぎがあつた時の事を思い出していた。

学内で起こった事件

学内の痴漢騒ぎが、一番最初に起こったのは、宏明が一回生の後期に入ってすぐの頃だった。当時、四回生だった女子大生が、教室の移動中、何者かに襲われ、誰もいない場所へと連れていかれ、身体を触られた、といいものだった。女子大生はあまりの恐さで覚えて、マスクをしていたため、どこの誰かわからない状況だった。

そういう被害の女子大生が、二ヶ月で二十人にもものぼった。

痴漢事件は生徒達の耳に入り、あっという間に噂は広まった。当然、宏明達も知っており、紀美や京子も不安が募っていた。大学側も事態を重く見て、犯人を探していたが、全く見当もついていなかった。

「痴漢の犯人って誰なんだろう？」

京子はカフェオレを一口飲んだ後に言った。

一日の授業後、四人は学内のカフェでお茶をすることになった。

「さあ…。これじゃ、オチオチ学校にも来れないぜ」

茂も同感したように言う。

「女子はみんな集団で行動してるけど、大学に行きたくないって言うてる子もいるよ」

「そうそう。早く解決しないかな」

京子と紀美は交互に言う。

「でも、なんで一人の時なんだろう？ 一人で行動してても、周りに人がいるからバレるだろう？」

茂は前から疑問に思ったことを口にした。

「連れ去るっていつでも、一瞬のことだからわからなかったものもあるし…」

「人一人、連れ去るのは簡単なことじゃないぜ？ 薬を嗅がされてたならいけるかも知れないけど、被害者は薬を嗅がされてなかったみたいだしなあ…」

途方に暮れた表情をする茂。

「襲うにしても、授業の移動中っていうのが気になるよな」

アイスコーヒーのグラスの中に入っているストローを触りながら呟く宏明。

「確かにそうよね。全ての被害者は、教室の移動中に襲われてるもんね」

「別に人が少なくなる放課後でもいいのにつて…そう思わねーか？」
同意を求める宏明。

「そういえば…」

「犯人さえわかれば、本当のことがわかるんだけどな」

そう言うと、宏明はアイスコーヒーを飲み始めた。

——女子を恐怖に陥れてる痴漢の犯人。今も堂々と日常生活を送っていることが、腹立たしいな。

宏明の中に怒りがこみ上げてきた。

「ねえねえ、今日も痴漢騒ぎが起こったらしいわよ」

そう聞こえてきたのは、四人が座っているテーブルの隣のテーブルからだった。

話していたのは、ギャル風の女子三人組だ。

「えーっ、ウソー?! いつなのー?!」

「今日の三現目の授業後。噂通り、教室の移動中みたいよ」

「またあ?! 全く痴漢は誰がやってんのよ?」

一人の女子が苛立ちながら言った。

「ホントよねー。さっさと犯人捕まえてほしいんだけどお…。これじゃあ、学校に来る気なくすし!!」

「うんうん。学校側も何やってんのよ? って感じだし…」

残りの二人も同感している。

「また起こったみたいだね」

紀美は小声で言う。

「みたいだな。なんとかならないもんかな」

茂はため息をつく。

そんな会話を聞いているうちに、宏明の中である思いが芽生えていた。

——オレ、なんとかしたい。この事件を解決したい。

そう心の中で思っていたが、口には出さずにいた。口に出してしまえば、“解決出来るわけがない。無理だ”と言われるのが、目に見えていたからだ。

しかし、一人で痴漢騒ぎを解決したいと思っても、どうしていいのかわからない。被害に遭った女性に、詳しく話を聞いていいが、恐らくおもいだしたくはないと言われてしまったらどうしようもない。それに、学校側に話したことを何度も話したくないというのが、被害に遭った女性の心境だろう。

それらを考えると、途方に暮れてしまう。

——最初からつまづいてるな。本当にどうしたらいいんだろう？

宏明は自分がどう行動したらいいのか考えていた。

「ヒロ：？」

茂が宏明の顔をのぞきこむ。

「え…：？」

「怖い顔してどうしたんだよ？」

「あ、いや、別になんでもねーよ」

首を横に振る宏明。

「痴漢騒ぎ、早く解決するのを願うだけだね」

紀美は残り少ないレモンティーを飲み干した後に行った。

女子大生はあまりの恐さで覚えていることが少なかったが、黒い帽子を深くかぶり、サングラスをかけ、マスクをしていたため、どこかかわらない状況だった。

そういう被害の女子大生が、二ヶ月で二十人にもなった。

痴漢事件は生徒達の耳に入り、あつという間に噂は広まった。当然、宏明達も知っており、紀美や京子も不安が募っていた。大学側も事態を重く見て、犯人を探していたが、全く見当もついていなかった。

「痴漢の犯人って誰なんだろう？」

京子はカフェオレを一口飲んだ後に言った。

一日の授業後、四人は学内のカフェでお茶をすることになった。

「さあ…。これじゃ、オチオチ学校にも来れないぜ」

茂も同感したように言う。

「女子はみんな集団で行動してるけど、大学に行きたくないって言うってる子もいるよ」

「そうそう。早く解決しないかな」

京子と紀美は交互に言う。

「でも、なんで一人の時なんだろう？ 一人で行動してても、周りに人がいるからバレルだろ？」

茂は前から疑問に思ったことを口にした。

「連れ去るっていつでも、一瞬のことだからわからなかったものもあるし…」

「人一人、連れ去るのは簡単なことじゃないぜ？ 薬を嗅がされてたならいけるかも知れないけど、被害者は薬を嗅がされてなかったみたいだしなあ…」

途方に暮れた表情をする茂。

「襲うにしても、授業の移動中っていうのが気になるよな」

アイスコーヒーのグラスの中に入っているストローを触りながら呟く宏明。

「確かにそうよね。全ての被害者は、教室の移動中に襲われてるもんね」

「別に人が少なくなる放課後でもいいのにつて…そう思わねーか？」
同意を求める宏明。

「そういえば…」

「犯人さえわかれば、本当のことがわかるんだけどな」

そう言うと、宏明はアイスコーヒーを飲み始めた。

——女子を恐怖に陥れてる痴漢の犯人。今も堂々と日常生活を送っていることが、腹立たしいな。

宏明の中に怒りがこみ上げてきた。

「ねえねえ、今日も痴漢騒ぎが起こったらしいわよ」

そう聞こえてきたのは、四人が座っているテーブルの隣のテーブルからだった。

話していたのは、ギャル風の女子三人組だ。

「えーっ、ウソー?! いつなのー?!」

「今日の三現目の授業後。噂通り、教室の移動中みたいよ」

「またあ?! 全く痴漢は誰がやってんのよ?」

一人の女子が苛立ちながら言った。

「ホントよねー。さっさと犯人捕まえてほしいんだけどお…。これじゃあ、学校に来る気なくすし!!」

「うんうん。学校側も何やってんのよ? って感じだし…」

残りの二人も同感している。

「また起こったみたいだね」

紀美は小声で言う。

「みたいだな。なんとかならないもんかな」

茂はため息をつく。

そんな会話を聞いているうちに、宏明の中である思いが芽生えていた。

——オレ、なんとかしたい。コの事件を解決したい。

そう心の中で思っていたが、口には出さずにいた。口に出してしまえば、“解決出来るわけがない。無理だ”と言われるのが、目に見えていたからだ。

しかし、一人で痴漢騒ぎを解決したいと思っていても、どうしていいのかわからない。被害に遭った女性に、詳しく話を聞いていいが、恐らくおもいだしたくはないと言われてしまったらどうしようもない。それに、学校側に話したことを何度も話したくないっていうのが、被害に遭った女性の心境だろう。

それらを考えると、途方に暮れてしまう。

——最初からつまづいてるな。本当にどうしたらいいんだろう?

宏明は自分がどう行動したらいいのか考えていた。

「ヒロ…?」

茂が宏明の顔をのぞきこむ。

「え…?」

「怖い顔してどうしたんだよ?」

「あ、いや、別になんでもねーよ」

首を横に振る宏明。

「痴漢騒ぎ、早く解決するのを願うだけだね」

紀美は残り少ないレモンティーを飲み干した後に行った。

それからあつという間に一週間が過ぎた。

四人がカフェで聞いた痴漢騒ぎ以来、痴漢はなく、いつ起こるか学内はヒヤヒヤしていた。

そんな中、紀美と京子の友達が痴漢に襲われたのである。宏明と茂は、紀美と京子のメールで知り、昼休みに急いで事務まで来た。

二人が事務の奥にある個室へ向かうと、紀美と京子の友達は学科長と事務員が二人の計三人がいた。

被害に遭った紀美と京子の友達は、襲われた恐怖からか身体が少し震えていた。

「君達は…?」

事務員の一人が、宏明と茂の顔をまじまじと見て聞いてきた。「この方の知り合いで…」

宏明がそう答えると、事務員は「そうか」と言ってくれた。

「智美、大丈夫か?」

茂が心配そうに智美に声をかけた。

智美は小さく頷いただけだ。

「どんな奴だったか覚えてるか?」

「大学内で噂されてる人…」

智美はやっこの思いで、小さく震えた声で答えた。

「どこに連れて行かれたかわかるか?」

「：教授の部屋らしきとこだった：」

智美の言葉に耳を疑う一同。

「もしかして、この大学の教授が：？」

学科長は信じられないという口調になる。

「まさか：」

二人の事務員も驚く。

五人の脳裏には、嫌な予感がよぎった。

「その人の雰囲気とかはわかるか：？」

恐る恐る、茂が聞いてみる。

「覚えてなくて：。ごめんなさい」

「全然いいんだって」

そう言うと、茂は宏明を見た。宏明は茂と目を合わせると頷いた。

「智美、その部屋にどれくらいの時間いたんだ？」

「二十分くらい。その後、部屋の前で追い出されたの」

「そっか：」

宏明は黙ってしまう。

――約二十分もの間、犯人は智美を犯していたってかけか。

宏明は一週間前に自分の中に芽生えた想いを、思いきって告げることにした。

「オレ、今回の痴漢の犯人探してみます」

静かな口調で言った宏明に、再び驚く一同。

「ヒロ、何言ってるんだよ？」

「待ってても仕方ない。被害者が増えるだけだ。このままだったら、“痴漢の大学”として、悪い噂がたって、来年この大学の志願者が減るだけだ」

真剣な表情で学科長に自分の思いを伝えた宏明。

「そうだな。生徒に痴漢の犯人を探してもらうのは心苦しいがやってもらおうか。言ってくれたらいつでも私も手伝うよ」

学科長は頷きながら言った。

宏明は「わかりました」と返事した。

「では、今日のところはこれで…。昼からも授業あるがどうする？
今日は無理はしなくていいんだか…」

事務員の一人が、智美に言った。

「大丈夫です。授業はでれます」

智美は黒のカーディガンを着ながら答える。

「本当に無理しなくてもいいんだぞ？」

茂は念のためもう一度聞く。

「いいの。何かしてないと思出しちゃうもん」

「そうだよな。食堂にノンちゃと京子がいるし行こうぜ」

茂は明るく言った。

翌日から宏明の痴漢騒ぎの犯人探しが始まった。犯人を探すのには、かなりの時間を要した。事務員に今まで被害に遭った女性の名前を聞き、直接会ったりした。

被害者のほとんどは、思い出したくないという理由で話してくれなかったが、被害に遭った中の四人は、“自分の証言で犯人がわかるなら…”と言って、全てを語ってくれた。

宏明の五枚にわたって書かれたルーズリーフには、被害女性の実態が綴られていた。

「宏君、どう？」

学内のカフェで、紀美が聞いてきた。

「うーん…全くわからない。無謀だったかな、こんなこと引き受けて…」

宏明はルーズリーフを見ながら答えた。

「ううん、そんなことない。宏君が痴漢の犯人を探すって言っただけでも凄いと思う。私には出来ないことだもん」

紀美は感心しきっている。

茂と京子も同様のことを思っていた。

「なんで、事件解決するって言ったのよ？ 今までのヒロならこん

なの興味なしって感じじゃない？」

京子はアイスクリームを食べながら、なんか納得いかないような口ぶりで聞いてきた。

「確かに。オレにもなんでヒロが痴漢騒ぎに首突っ込んでんのかわかんねーよ」

茂も首を傾げる。

京子と茂には、宏明がなぜ痴漢騒ぎの犯人を探し当てると言ったのかかわからないでいる。

「放っておけねーんだ。ただそれだけの理由なんだけどな」

「放っておけないってのはわかるけど、大学側もなんとかしてるって…」

「一人でも多いほうがいいだろ？ それに学生一人でも協力すると、学生の視点から何かわかるかもしれないってわけだ」

宏明はイスの背もたれに深く腰をかけながら言った。

「なるほど。ヒロ、くれぐれも注意して、あまり深入りして犯人に襲われたっていうのはやめてよね」

京子は宏明に忠告する。

「それは大丈夫だ。犯人は女子だけしか襲わないみたいだし…」

「万が一ってこともあるから…。ヒロには気を付けてもらわないかね」

「心配してくれてありがとうな」

「ヒロは仲間だしね」

とびきりの笑顔を宏明に向ける京子。

宏明もつられて笑顔になる。

その瞬間、紀美の胸中は一抹の不安を覚えた。

「でも、一っだけ気になることがあるんだな」

「気になること…？」

茂は首を傾げる。

「被害者の四人…智美も入れて五人になるんだけど、智美を含めた三人が部屋らしきところに連れて行かれてるんだよな。学科長達もま

さかという表情してたけど、そのまさかつてのもあるしな」

頭をかきながら答える宏明。

「教授ってわけ？」

「まだなんとも言えないけど、大学内の誰かが犯人ということは確かだ。それに教授の部屋らしきところで襲われた被害者は他にもいると思う」

「教授の部屋らしき場所以外で襲われた被害者は、どこで襲われたの？」

疑問をぶつける京子。

「校舎の草むらって答えてくれた」

「校舎の草むらって：すぐバレてしまいそうじゃん？ 草が生えてるっていつても、せいぜい20〜30cmくらいだし、昼間人通り少ないのに襲うことは可能なのかよ？」

茂は校舎内に生えている草のことを知っているため、本当にそんなところで犯行が行えるのか不思議だった。

「人通り少なくとも大声出さなかったらどうだ？ 紀美と京子に考えて欲しいんだけど、もし犯されてる最中、大声なんて出せるか？」

宏明は真剣な面持ちで、紀美と京子に聞いてきた。

二人は少し考えると、

「私は出せない」

「私も…。とてもじゃないけど恐くて…」

「だろ？ 被害者も紀美と京子と同じ心境だったってわけ」

「じゃあ、犯人は被害者の心理をついたってこと？」

「そういうこと」

そう答えると、宏明は考え込んだ。

——被害者だけの証言だとなんかしっくりこない。犯人に近付く何かがあれば…。それに犯人の目的もわからない。女性だけを狙うから、よっぽどの何か理由があるはずなんだけど、その理由が全くわからない。

「あの…二葉さん…？」

腕を組んで痴漢の件で考え込む宏明に、一人の女性が声をかけてきた。

四人はその女性に目をやったのと同時に、宏明はあっと声を出した。痴漢の被害の話を聞く時に、思い出したくないと言って語ってくれなかった女子学生の一人だ。

「ヒロ、知ってる人？」

「あ、うん…。どうしました？」

「痴漢の件でお話があって…。いいですか？」

「いいですよ」

返事をする、自分の席に座らせた宏明。

「えっと…二回生の滝田照美さんでしたっけ？」

照美はコクリとうなずいた。

「で、話というのは…？」

「はい。話そうかどうか迷ったんですが、話しておいたほうがいいと思ったんで…。行為の最中、香水が鼻についたんです」「香水ってどんな匂いだったか覚えてたりしますか？」

京子は優しい口調で聞いた。

聞いたのが京子だったので、安心した照美は、自分が嗅いだ香水を思い出していた。

「あまり香水には詳しくないんですが、シトラスミントっぽい匂いだったかと思います」

「シトラスミントっぽい匂い…？　なんていう名前の香水なんだろう？」

首を傾げる紀美。

「名前までは…すみません」

「全然構いませんよ。こうやって話してくれただけでも、ヒロにとっては貴重な情報なんだし…」

笑顔で言う茂の声を聞きながら、宏明は何かを思い出していた。

——シトラスミントっぽい香水…？　オレ、どこかで嗅いだことがある…。

「ヒロ、どうしたのよ？」

「シトラスミントっぽい香水ってオレらも嗅いだことあったよな？」

「あったっけ？」

「あったって。オレらの知ってる人物の中で……」

途中まで言いかけた宏明の脳裏に、今回の痴漢の犯人の顔が思い浮かんでいた。

「滝田さん、ありがとうございます！　おかげで犯人がわかりました！」

宏明はカフェ全体に響き渡るような大声で、輝美に礼を言った。そして、ルーズリーフをカバンの中に片付け、証拠集めへと思い、紀美達を残し、カフェを出た。

痴漢騒ぎの真相

翌日の五限目が終わった午後六時半、教室の一室で痴漢騒ぎの真相を話すことにした宏明。宏明達四人と今回事件を解決するにあたって協力してくれた被害者の六人と理事長と学科長と事務員二人の計十四人が集まった。

事件のことを考えているのか、宏明は目をつぶりイスに深くもたれかかっている。

教室内は誰一人として口を開く者はいない。

そんな状況が何分経った頃、理事長が口を開いた。

「文学部国文科の二葉君といったね？　そろそろ痴漢の犯人を教えてもらいたいんだが……。私も暇じゃないんでね。早くしてもらわないと困るんだ」

まるで痴漢騒ぎは自分には関係ないんだ、痴漢に遭った女子学生が悪い、服装で襲ってくれといっているようなものだ、と言わんばかりの口調で、宏明に催促した。

宏明は理事長の言葉で、目を開き、緊張しながら前へ出た。

「この痴漢騒ぎが起こったのは、今から二ヶ月少し前の十月入ってすぐのこと。最初の被害者が四回生の女子学生が教われたのは、みなさん覚えてますよね？」

比較的やわらかい口調の宏明の質問に、うなづく一同。

「一番最初の被害者は、教室の移動中に襲われ、誰もいない場所へと連れていかれて犯された、とのことでした。その他の被害者もそう語っていました。ここで注目してもらいたいのが、被害者が連れていかれた場所です。滝田さんを除く五人が連れていかれた場所は、二ヶ所あったんです」

「二ヶ所……？　被害者によって襲われた場所が違っていてわけか？」
学科長が目が丸くして驚いた。「そういうことです。その二ヶ所は、教授らしき部屋と校舎の草むらの中です。滝田さんはどちらでした

か？」

「草むらのほうです」

照美は小さな声で答えた。

「そうですか。なぜ、犯人はこの二つに場所を変えたのでしょうか？ それは犯人の時間差だからなのです」

「時間差って…？」

「簡単に言うと、犯人の時間があるかないかということです。校舎の草むらで襲われた被害者は時間が短くて、教授らしき部屋で襲われた被害者は時間が長い。校舎の草むらのほうが、時間としては五分程度なんです」 宏明は全体を見るように言った。

「なんでわざわざ襲う場所を二ヶ所も用意したのよ？ もし、襲うなら時間がある時にすればいいのに…。何も時間がない時にまで襲う必要なんてないじゃない。それに被害者を襲うなんてヒドイ」 京子はだんだん憤った口調になる。

「確かに京子の言ったことに一理ある。だけど、犯人はどうしても時間がない時にでも襲いたかった。自分の欲望を満たすのは勿論、女性を襲うことによって、自分を保っていた、というところですよ」 「自分を保っていた、ということは、女性を襲わないとストレスになっていた、自分らしい行動が出来ないってわけか？」

事務員の一人が啞然とした表情、宏明に聞いた。

「そういうことです。時間がなくてもなんとしてでも女性を襲いたという、女性への性癖が犯人にはあったんだと思います」

宏明はしっかりとした口調だったが、内心、みんなの前で犯人の名前を告げていいものかどうか迷っていた。

しかし、迷っていても仕方がない。宏明自身が痴漢の犯人を探すと言った時点で、犯人がわかれば犯人の名前を明かすという条件だったし、第一に自分が最初に言い出したことであるため、後戻りは出来ない。

「女性への性癖をもって、犯人は日常生活を送っていたってわけか。でもなんで二ヶ月前からなの？ 今まで痴漢の兆候があったんだと

思うけど、本格的な被害者って二ヶ月前だったじゃない？」

宏明の言ったことに疑問を持つ紀美。

「詳しいことは犯人に語ってもらおうとするけど、今までの欲望が二ヶ月前に爆発したってところだと思います」

「それが被害者を増やしたってわけか。二葉君、痴漢の発端を起こした犯人ってのを教えてくれないか？」

学科長がみを乗り出す。

「この痴漢騒ぎに終止符を打ちましょうか。犯人は理事長、あなたですよ」

宏明は意外にも冷静に理事長を見つめて言った。

それに反して、目を丸くして理事長を見る紀美達。

「り、理事長?! 本当ですか?!」

学科長はあたふたした様子で、理事長の肩を触る。

「二葉君、何言ってるんだね? 冗談を言うんじゃない」

理事長はばかけたことを言って：というふうな表情を、宏明に向けた。

「冗談じゃありません。まずあなたは睡眠薬何かを染み込ませたハンカチを被害者に嗅がせ、あなたの部屋あるいは校舎の草むらに連れて行き、行為に及んだ。部屋の場合、用が済むと自分の部屋の近くに追い出した。顔を見られたらのために、黒い帽子を深くかぶり、サングラスにマスクという出で立ちで、女性を襲った」

「襲ったのって授業の移動中だろ? なんで人目につきやすい廊下なんだよ?」

「それはオレもなんでわからなかった。放課後じゃなくて人の多い授業の移動中なんだろうって…。でも理由がわかったんです。理事長は自分の好みを物色し、教室の移動中に襲った、ということです」

宏明の言葉に、息を飲んだ全員は理事長のほうを見た。

「放課後だとサークルなどで人が少なくなり、自分の好みの女子も少なくなる。授業のある昼間だと女子が多くてタイプを物色出来る

ってわけだ」

「なるほど。それで理事長と廊下で会ったりしてたんだ」
被害者である智美が、納得したような表情で言った。

「そういえば、たまに理事長と廊下で会うことあった！」
京子も首を縦に振り言った。

理事長は大学内の生活ぶりを見るために、二週間に一度見回っていたのだ。始めのうちは宏明も一回生が入学したから慣れるかどうかで見ているものだと思っていたのだが、次第に違うと感じ始めていた。

「証拠はあるのかね？ 証拠がないと私が犯人だと言えないんじゃないのか？」

理事長は陰しい表情を宏明に向けた。

「今あなたがつけている香水です」

「香水……？ それがどうしたっていうんだ？」

「滝田さんがシトラスミントっぽい匂いのする香水が鼻についたって言っていたんです。実際、オレもあなたと二回程すれ違った時に、シトラスミントの匂いが鼻についたんです」

宏明は神妙な面持ちで答える。「シトラスミントの香水なんて他にもつけているだろう。それだけで犯人扱いされたら困るな」

理事長は今まで話した宏明の推理をバカにしたような態度をとる。そんな理事長の態度を、宏明以外の全員は、苛立ちを覚えていた。宏明のほうはというと、黙りこくったまま何も話さないでいる。

「確たる証拠がないなら、私はもう家に帰らせてもらうよ。無駄な時間を過ごしてしまった」そう言うと、理事長は立ち上がった。

「ちょっと、宏君、どうするのよ？」

近くに座っていた紀美は、宏明に声をかける。

不安そうな紀美に、心配するな、大丈夫だという宏明は、

「理事長、その靴に泥がついていますよね？ どこでついたんですか？」

理事長の靴についた泥を指摘した。

「ああ：これか。さあな。きっとどこかでついてしまったんだろう」
立ち止まり自分の靴についた泥を見つめながら答えた理事長。「その泥は校舎の草むらで女性を襲った時についたんです。校舎の草が生えている根元は、湿り気が多くて靴に泥がつきやすい。あなたはせっかくい草靴を履いているのに、泥が落ちていない。疚しいことをしているのになぜですか？」

そう言いながら、宏明は理事長に近付いた。

理事長は宏明から目を反らす。「理事長、本当のことを話して下さい」

照美が静かな口調で言った。

「あなたの靴についている泥と校舎の草むらの土を調べたらわかるんですよ？」

被害者全員の思いをひしひしと感じていた宏明は、必死に罪を認めさせようとしている。

依然、何も語らない理事長に、智美が口を開いた。

「せっかくこの大学で勉強しようって思って入学したのに、あなたはみんなの思いや夢を潰す気ですか？ やったならやったと正直に言ったらどうなんですか？」

「な、何を言ってるんだね?! 私がやったのは…」

理事長は自分の言ったことに不自然なことに気付き、ハッとなった。

「理事長がやったんですね…」 茂は理事長にポツリと言う。

「…そう私だよ…」

「なんでですか？」

「そうですよ。理由を教えてください」

事務員二人が交互に信じられないという口調になる。

「私は十五年前に理事に就任した。しかし、意外にも理事という職は、大変でストレスが溜まるもんなんだ。二葉君が言うとおり、自分の欲求を満たすために女性を襲ってしまった。被害者の女性には本当に申し訳ないことをしてしまったと思っている。謝っても許してもらえないとは思っていないが、このとおりだ」

理事長は被害者女性に土下座んして謝る。

「女性に恐い思いをさせておいて土下座だけ？ 本当にありえないし信じらんない！」

京子は怒りをあらわにした。

「被害者の皆さん、警察に相談すれば、理事長をわいせつ罪か何かで警察は動いてくれると思いますが、どうします？」

宏明は被害者女性六人に向かって、警察に行くかどうか聞いた。

そんな宏明の様子に、理事長は青ざめた表情をした。

「二葉君、警察だけはやめてくれないか？ 私には家族があるんだ」
「さすがのような目で宏明に言う。」「あなたは何言ってるんですか？

家族がいるのはあなただけじゃない。被害者のみんなだって俺にだって家族はある。大切にしている人がいる。それなのにあなたはなんなんですか？ 自分の身を守るために、自分が行った罪から必死に逃れようとしている。これは警察に行って、頭を冷やしてもらったほうがいいですね」

宏明は呆れた表情を浮かべて言った。

宏明だけじゃなく、他の全員も同じ想いだった。

「自分の行った罪から逃れようとしている…。そうだな。そうかも知れないな…」

理事長は力が抜けたようにその場に座り込んだ。

こうして、学生を恐怖に陥れた痴漢騒ぎが幕を閉じた。

それから一週間が過ぎ、学生全員に理事長が痴漢の犯人だと伝えられ、宏明が事件を解決したことも伝えられた。

事件解決によって、被害者の女性——計二十五人は警察に被害届を提出し、理事長は警察に逮捕され、理事長という職を自ら辞めた。

「見事だったね。ヒロ、カッコよかった」

京子はアイスレモンティーを飲みながら、まるで恋する乙女のような目で宏明を見て言った。四人は放課後、いつものように学内にあ

るカフェへと集まった。

「カッコいいって：京子に言われてもなあ：」

宏明は複雑な表情をした。

「何よ？ ヒロはノンちゃんに言われたほうがいいのよね」

「別にそういう意味では：」

「じゃあ、どういう意味よ？」 「え？ どういう意味って：特に：」

あたふたしながら宏明は、紀美のほうをチラリと見る。

紀美は何か物思いにふけりながら、いつもは飲まないホットミルクの入ったマグカップを両手で持って、何かを考えている。――最近、紀美って考え事してることも多いな。なんか気になる：。

「ヒロが敬語になってたのが笑えたぜ」

ケラケラ笑いながら茂は言う。「だってさ、タメで話してたら説得力ないだろ？」

「まあな。でも、理事長が犯人だって認めてくれてよかった。あの時、罪から逃げようとしてたもん。まっ、これで女子も安心して学校に通えるな」

茂はどこかホッとした口調で言った。

「そうね。私もノンちゃんも安心出来るってわけよ。ねっ、ノンちゃん？」

京子は紀美に同意を求めるが、何も反応しない紀美。

「ノンちゃん？」

「あ、うん：痴漢ね」

紀美は不意をつかれたように慌てた様子になる。

「もー、聞いてなかったでしょ？」

「ご、ごめん：」

「別にいいけど：。私、そろそろ帰るね。もうすぐバイトだわ」
アイスレモンティーを一気に飲み干して、急いで立ち上がる京子。

「オレらもそろそろ行こか」

茂も立ち上がる。

「オレは残る。紀美に話あるし：」

宏明の意外な言葉に、えっという表情をする紀美。

「ふーん：二人で次のデートどこにしようって決めるわけか：」

「そんなところ：かな」

「そっか。私達はお先にね」

二人に手を振ると、宏明は紀美に顔を向けた。

「あ、あの：宏君：？」

急な展開に動揺を隠せないでいる紀美。

「最近、悩み事あるんだろ？　ここのところ、悩んでるみたいだし心配になって：。オレに言えない悩みなら無理強いはしなくていい」
宏明は真剣な表情だか、内心は必死だ。

「悩みか：。答えがわかる悩みならいいんだけどさ」

いつもと少し違うテイストの違う紀美は、

「宏君、人を好きになって不安になることってある？」

ただ驚く宏明は目を丸くした。しかし、すぐにさっきの真剣な表情になると、

「あるぜ。毎日のように不安だ。紀美がオレと別れて他の男と付き合わねーか、とかな」

「そっか、ありがとう」

紀美は嬉しそうに笑い、立ち上がる。

「オレの質問の答えになってねーぞ？」

「宏君と一緒によ」

「オレと一緒に：？」

「うん。最近、京ちゃんと二人きりでいたりすること多いから、もしかして京ちゃんのこと好きなのかなって：。それなら別れてくれたらいいのって：」紀美はさらりと答えてしまう。「別れるなんて言葉使うなよ」宏明のたった一言に、コクリ頷く紀美。

——オレが好きじゃない言葉の一つの“別れる”。一番言われたくない言葉でもある。付き合ってから始めて紀美が言ってくれた気持ち、嬉しかったな：。

どこか安心しきった胸中の宏明。

これから先、痴漢騒ぎの件で、宏明は人探しや他愛のない相談を引き受けるようになる。

殺人事件の犯人を当ててるほどの実力を持つことも知らずに…。

ショックな心と後悔の気持ち

「へえ…あの理事長が痴漢なんてしてたのか…」吉田先生は目を丸くして驚いた。

二人は食後のコーヒーを飲みながら、ゆっくりとした時間を過ごしていた。

「その後の理事長はどうなったんだい？」

「警察に行って、理事長は辞めました。今はどうなってるかわからないですけど…」

「そうか。大学側が二葉君に痴漢を見つけてもらってたって公表したとなると、女子生徒に言い寄られるようになったんじゃないのかな？」

吉田先生はいたずらな目をしてニヤリと不敵な笑みを浮かべた。宏明は不意をつかれたように顔を赤くして下を向いてしまう。

「それが答えてわけか。ふーん…」

腕を組み、深くイスにもたれかかる吉田先生。

「あ、あの…言い寄られたとかモテるとかそんなつもりじゃ…」

吉田先生のいたずらな目に、思わず早口になる宏明。

「わかってるよ。でも、ただ痴漢騒ぎの犯人探すためだけだったんだろ？ それなのに、なんで人探しとか殺人事件の犯人なんか…？」

吉田先生の問いに、宏明はしばらく考えると、

「自分のやりたいことを見つけたかったんだと思います。国語の教師を目指すこと以外に、自分が夢中になれるもの。自分で気付かないうちに、ずっと探してたんだと思うんです」

コーヒーが入ったカップを見つめて答えた。

「自分のやりたいこと、夢中になれるもの、か…」

吉田先生は呟くと黙ってしまい、自分の学生時代を思い出しているのか、考え込んだ表情になる。

しばらく二人の間に沈黙が流れた後の吉田先生は口を開いた。

「なんか、そういうのカッコイイよな」

「えっ…？」

「手探りで自分のやりたいことや夢中になれるものってのを探していく。なかなかそういうのは出来ないもんや。今の世の中、やりたいこととか夢がないって人がいる。二葉君のように探している人は、もちろん僕は尊敬している。中にはやりたいことも探さずに世の中の批判ばかり。そんな風になるのはどうかと思う。やらなきゃいけないこと、自分だけが出来ることがあるよ。こんなこと言っている僕も昔は後者の人間だけだな」

頭をかき、バツが悪そうにする吉田先生。

宏明には意外だった。

「昔っていつても、大学の時だけど、何のヤル気もなかった時期があったんだ」

「でも、国語の教師になるために、教育実習までして頑張ってたじゃないですか」

宏明は目を丸くする。

「国語の教師になること以外はね。夢は夢のままで終わらせたくなかったんだ。今思うと、夢中になれるものをもっとやってあげれば良かったなあ…って、後悔はあるけどね」

優しく微笑んでくれる吉田先生に、なぜかしっくりこない宏明。

再会した今日まで想像していた人物とは、どこか違っていたのだ。

教育実習に来たあの頃からずっと、夢である国語の教師以外にも自分のやりたいことをやっているものだと思っていた。それが今日、自分の想像とはかけ離れてしまった。しかし、自分に夢を与えてくれた人物には違いない。

——現実と想像では違うんだってことを見せつけられてしまったな…。

宏明は誰かに胸を突かれたような気分になっていた。

自分がこうだと思っても、実際に話してみないとわからない。人間はそういうものである。

「吉田先生、今からでも遅くはないと思いますよ。人生は長いんだし、まだまだこれからですって」

宏明の言葉に、吉田先生はふっと笑った。

「そうだな。今からでもやってみるか」

「オレ、先生のことずっと尊敬してるんですから…」

「ありがとう。そう言ってくれて嬉しいよ」

吉田先生は淋しそうな笑顔で礼を言った。

この時、宏明は気に止めていなかったが、吉田先生のその淋しそうな笑顔が、今後の宏明を悩ますことになる。

そして、再び吉田先生と近いうちに会うことになる。会うことになるといっても、今回とは違うシチュエーションで会うことになるのは、宏明は全く予想もしていなかった。

吉田先生との再会から二週間、いつもどおり宏明は授業を終えて、紀美と一緒に帰ろうと約束していた。四限目の授業は、紀美と別々のクラスなので、宏明は紀美が受けている授業の教室の前で待つことにした。

待つこと五分、紀美は教室から出てきた。

「宏君、お待ちせ」

「うん。さ、行こうか。これからどうする？」

「どうしようか？ まだ四時半だしねえ…」

紀美は考えながら歩く。

今日は久しぶりのデートの日だ。この前のパスタ屋さんに行ったきりだから、一ヶ月近くもデートをしていない。

「そういえば、もうすぐでクリスマスだね。何か欲しい物ってある？」

紀美は思い出したように宏明に聞く。

「もうそんな時期か。欲しい物は特になんだけど、強いていえばカレンダーかな。来年、就活あるし、ちょっとしたことでも書き込

めたらなって…。手帳でもいいけど、毎日持ち歩くにはなあ…。紀美は？」

「私は財布かな。別にブランドじゃなくていいけど、オバさんが持つてるのは嫌かな。可愛いのがいいな」

紀美は笑顔で答える。

「カレンダーと財布の違いか…」
ポツリ呟く宏明。

「あ、いや、財布じゃなくてもいいの。宏君がくれる物ならなんでも嬉しいもん」

早口で一気にいってしまふ紀美。

「嫌味で言ったんじゃないよ」

プツと笑ってしまふ宏明。

その時だった。

ケータイが鳴って出る宏明。

相手は知り合いの警察官の谷崎警部からだった。

しばらく谷崎警部との会話をすると、宏明の顔色が変わった。

――マジで…？ そんな…。

放心状態でケータイを切ると、その場で立ちつくした。

「宏君…？」

紀美が心配そうに宏明の服の袖を引っ張る。

「これから署に向かう」

静かな口調で言う宏明。

「何があったか知らないけど、私も行っていい？」

二人が署に着いたのは、五時半前だった。

宏明は谷崎警部から告げられたことを、紀美には言わなかった。

宏明に呼び出された谷崎警部は、二人をある場所へと連れて行った。
そこは霊安室だ。

「二葉君、いいか？」

谷崎警部の問いかけに頷いた宏明は、大きく息を吸った。

宏明の頷きを見た谷崎警部は、白いシーツをめくった。死体を見た宏明は、ショックで声が出てこない。

その死体は、二週間前に会ったばかりの吉田先生だった。

「吉田先生の通っている高校の体育館の倉庫で首吊りで亡くなっていた。自殺だそうだ」

「自殺…？」

やっこの思いで言葉が出た宏明。

「ああ…。今日の五限目が終わった後、職員室に戻ったんだが、六限目が始まる前にはいなくなった。そして、終礼になっても先生が来ないとクラスの生徒から言われて探したところ、吉田先生が体育館の倉庫で亡くなっていた、というわけだ」

谷崎警部は同僚の先生に聞いたことを、二人に説明した。

宏明は何も考えられず、吉田先生をじっと見つめることしか出来なかった。

「…警部、なんでオレを呼んだんだよ？」

「吉田先生のケータイのメモリー中に二葉君の番号が登録されてて、それでな。とりあえず、会議室に行こうか」

谷崎警部は白いシーツをかけると、霊安室のドアを開けた。

会議室に着くと、宏明は一気に憔悴しきっていた。そんな宏明は見かねて、谷崎警部は自分の机からお菓子をそっと持ってきてくれた。

「二葉君、吉田先生と知り合いだったんだな」

いつもより優しい口調で言った谷崎警部。

「うん。中二の時に教育実習に来てくれた人で、二週間前に偶然、再会したんだ」

「そうか。吉田先生も国語の教師らしいが、もしかして吉田先生を目指して文学部に…？」

「そう。ずっと憧れてて、いつか再会したいって思ってた…。二週間前にやっと再会出来たところだったのに…」

そう言うと、宏明は深くため息をつき、頭を抱えてしまう。

宏明の脳裏には、吉田先生の淋しそうな笑顔が浮かんだ。

――あの時にはもう自殺を考えてたのかな？ オレは久々に会えて嬉しかったけど、吉田先生の胸の内は色んな葛藤があったはずなのに、なんでオレは汲み取ることが出来なかったんだろ…？

「吉田先生ってなんで自殺したのかわからないんですか？」

紀美は宏明の代わりに聞いた。

「校長や何人かの同僚から聞いたんだが、十月に行った中間テストで国語の不正行為があったんそうだ」

「不正行為…？」

「ああ…。吉田先生のクラスだけが満点に近い点数が続出したそう。元々、成績優秀者が90点台を取れるのはわかるんだが、赤点や成績が悪い生徒までも90点台を急に取れるはずがない。気になった別の国語教師が、調査したところ、事前に吉田先生が答えを教えていたことがわかったんだ」

「それで学校関係者から叩かれていたってわけか…」

谷崎警部の説明で、全てを理解した宏明は、今まで抱いていた吉田先生への理想が音を立てて崩れていった。

中二の時に感じた自信に満ちた吉田先生が、宏明が目標としていたあの吉田先生が、あろうことか自分の働いている高校で不正行為をしていたのだ。

自分の目標としていた人が、まさか不正をするなんて思ってもみなかった。それに、宏明はそういうことは正す人物だと思っていた。だからこそ、なんで？という疑問が自然とでてくるのだ。

宏明は大きなショックの中、深いため息をついた。

「それでその後はどうなったんだ？」

「吉田先生の高校で大きな問題になって、理事長や校長に経緯の説明を求められたそうだ」

「吉田先生の説明は…？」

あまり聞きたくなかったが、避けて通れないため、宏明は事実を聞

くことにした。

「赤点を取っている生徒に少しでもいい点数を取って欲しかった。自分のクラスから赤点を取る生徒をだしたくなかった、と言っていたそうだ」

気持ちにはわからないがという表情をする谷崎警部。

——クラスから赤点を取る生徒をだしたくない、か…。

「そんなことのために、吉田先生は不正をしたのか。もっと別のやり方があったはずなのに…」

力なくポツリ呟く宏明。

「まあ、吉田先生なりの生徒への思いなんだろう。やり方は間違っていたけど…」

「きっと生徒を思い過ぎて、不正をしてしまったと思う。生徒思いの先生だから、生徒にも人気があったはずだよ」

紀美は宏明を元気づけようとする。

「二葉君の目指していた人物が亡くなったんだ。立ち直るまで時間はかかるけど、自分の目標に向かって行って欲しい。時間は戻ってくれないんだからな」

谷崎警部も紀美同様、宏明を元気づけようと一つ一つ言葉を選んで言った。

宏明も二人の気持ちを汲み取っていたが、当分、吉田先生の自殺を受け止めて前に進む気にはなれない。

——吉田先生の淋しそうな笑顔。なんでそんな表情をしているのか。きちんと聞けば良かった。答えてもらえなくても聞くべきだった。人の気持ちをわかることは難しいことだけど、もう少し気を使うことが出来ていたら…。

宏明の中で、悔やまれることが多い。

「警部、吉田先生の処分ってのは…？」

「まだ確定していなかったみたいだが、来年の四月から違う高校に異動が有力だったみたいだ。異動なんてさせずに、もう一度チャンスを与えてあげたら良かったのに…」

「そうなんだな…」

これ以上の言葉が出ない宏明は、下を向いて教育実習の最終日に吉田先生が言ってくれた言葉を思い出していた。

……辛いことや嫌なこともたくさんある。それらから逃げたら負けになるから……

——そう言ってくれたのに……。結局、言った本人が辛いことから逃げて、自殺してしまった。これじゃあ、矛盾してるな。逃げるなどは言わないけど、自殺してしまうなんてズルイ。ズルすぎる。

「やっぱり、学校で白い目で見られてたのかな？」

「多分、白い目で見られてたんじゃないかな。一度、不正をしたら、嫌でも他の先生にも知られてしまうからな」

「そんなの悲しすぎる。確かに不正はしてはいけないことだけど、何も白い目で見えるなんて……。同じ教師なのにね」

紀美は伏せがちに言った。

「まったく皮肉なもんだよ。不正すると違う学校に異動させるなんて……」

ため息まじりでなんともいえない表情になる谷崎警部。

宏明もなんともいえない表情になり、胸の中にはポツンと穴が開いていた。

谷崎警部の言うとおり、吉田先生がいなくても、自分の目標に向かわなくてはいけないし、もう後戻りは出来ない。いつまでも落ち込んでいても、吉田先生は生きて戻ってはきてくれない。今回のことをバネにしていかなくちやいけない。

——これから先、自分は何を目標としたらいいんだろう……？

こんなに悩むのはオレらしくないっていうことはわかってる。だけど、もう少しだけ前に進むのはやめておきたい。今は前に進むのはしたくない。こんなに苦しむのなら、吉田先生と再会しなければ良かった。

後悔ばかりになっているが、いつかはそんなふうになくなる日も来ると信じて、宏明の脳裏には吉田先生の顔が浮かんだ。

「宏君、辛いけど一緒に頑張ろう。きっと、吉田先生は嬉しかったと思う。再会出来て、自分を目標として教師を目指してくれるなんて、教育実習に来ていた時には思ってもみなかったと思う。最後の最後に、宏君と再会したことが、吉田先生にとって今までの最高の思い出になったんじゃないかな。もちろん、宏君と語れたこともね」

紀美は一つずつ言葉を選んで、宏明に伝えた。

宏明には、紀美の言葉が胸に響いた。

「そうだな。オレも頑張らないとな。吉田先生とのこと後悔ばかりになってたけど、人と出逢う縁に後悔はないんだよな。出逢うってことは、何かの縁なんだから、出逢わなければ良かったってことはないんだな。第一、オレ自身が吉田先生と再会したいって強く願ってたんだしな」

宏明はさっき自分が思っていた、吉田先生と再会しなければ良かったという気持ちを訂正した。

「そうよ。宏君は宏君らしく、自分のペースでいこうよ」

「僕は見守ることしか出来ないが、しっかりと自分が選んだ道へと歩いてくれ」

谷崎警部は微笑んで言った。

——吉田先生、オレは先生の分まで頑張る。吉田先生の気持ちは十分に伝わっているから…。

宏明は空の上にいる吉田先生にメッセージを込めながら、窓の外を見た。

兄弟の絆

クリスマスも終わり、年の瀬が押し迫った十二月三十日、宏明はバイトが終わり、帰宅したのが午後十一時半になった。この日は、今年最後のバイトで、バイト先の仲間と初詣に行く約束を簡単にしてきた。

バイクを家の車置き場に置き、家の中に入ると、何やら騒がしい声が聞こえてきた。

宏明は何事かと思い、そっとリビングに入ると、両親がケンカをしている。

「あなたはいつも仕事ばかり。少しは家のことも手伝ってよ。私だって、仕事してから家のことをしているんだから……。あなたが少し手伝ってくれるだけで、私は楽になれるの」

母はいつにも増して機嫌が悪い上に、叫びにも似た声を出している。「そう言ったって、オレだって忙しいんだぞ。手伝いたいと思っていても、残業続きで疲れているんだ」

父は困ったなという表情でいる。

「そうよね。家庭よりも仕事のほうが大事なのよね。それに、手伝おうって気持ちがあれば、仕事で疲れてても手伝ってくれるはずよ。結局、口ばかりじゃない」

そう言うのと、母はプイッと顔を横に向けた。

「あのなあ……」

父はいい加減にしろよという態度だ。

宏明は二人に気付かれないように、一番上の兄の部屋へと向かった。なんとなく、自分の部屋に戻る気にはなれなかった。

「あ、宏明、バイト終わったんだ？」

一番上の兄、友明が部屋に入ってきた宏明に聞く。

「あ、うん……」

さっきの両親のケンカシーンを見たせいか、元氣よく返事出来ない

宏明。

友明の部屋には、二番目の兄、和明もいた。

「なんか、元気ないじゃん？」

和明は意味ありげに宏明に近付いて聞いてくる。

「うん、さっき、リビングで親父とお袋がケンカしてた」

「ああ：宏明が買ってくる少し前からだ。二人のケンカなんて、今に始まったことじゃねーよ。オレらが小学生の頃からケンカしてたし、見慣れてる。ちょっとしたキツカケでケンカばかりじゃなか」
友明は呆れた表情をする。

和明も同感したようだ。

「まあ、そりゃそうだけど：。あーあ、なんとかなんねーかな？

あの二人：。オレからすると見てられねーよ。早く離婚してしまえば、楽だと思うけどな」

宏明は深刻な顔つきで言った。

「オレらだって思うことは一緒だ。オレらのために、離婚しないんだろうけど、いつかはダメになると思う。あの二人の仲良い姿を見たのは、数えるくらいだしな」

友明は今までの両親のことを思い出していた。

「他の家族とこの子供だったら良かったのに：。友達の子供になりたいって思ってしまう」

「どこの家も同じだって。オレらの友達だって“二葉んちの子供になりたい”って思ってた奴もいたと思うぜ」

和明は宏明に自分の家だけではないと教える。

それくらい宏明にだってわかってる。

子供の頃から、自分の両親を見ているため、友達両親が羨ましく思えてくるのだ。

ずっと、自分の両親が不仲すぎる、夫婦ゲンカが多すぎる、と感じていた二葉三兄弟。

「いっそのこと、オレらこの家を出るか？」

和明はボソツと言う。

「それ、いいかもな。マンションでも借りて、三人で生活ってのも悪くないな」

友明も和明の意見にのる。

「オレと兄貴は働いてるし、宏明だってバイトしてるから、なんとか生活出来るだろ？」

「一度、やってみるか？ 実はオレ、この家出たいって思ってたんだよな」

友明は伸びをして言う。

「オレもなんだ」

「お、そうなんだ。宏明はどうだ？」

「いいかも…。親父とお袋の二人にしても大丈夫だろ？」

宏明も親元を離れてみたいと思っていたのだ。

いつまでも親と一緒に住めるわけではない。いつかは親元から離れないといけない日がやって来る。それが今なのかもしれない、と感じていた宏明。

「今すぐに…っていうのは無理だけど、来年の春ぐらいには、三人で生活していききたいよな。ま、このことはオレが二人に言っておく」友明はこの話は長男の自分がするべきだというふうな口調で言った。「悪いことばかりじゃないけどな。旅行に連れて行ってくれたし、ちゃんと学校にも通わせてもらったしな。子供三人を育てるのは、簡単なことではないもん」

和明は感謝の念を含めて言った。

「そうだな。一人でも大変なのに、よくここまで育ててくれたよ。そう思うと、ありがたいと思わないとな。特にオレなんか大学まで行ってるし…」

宏明は友明のベッドに寝転がる。

「オレだって専門学校だぜ？」

「和兄さんは二年じゃん？ オレは四年だもん」

「大学も専門も大変だ。やっぱ、オレも進学すれば良かったかな…」
唯一、高卒の友明はため息まじりで言う。

友明は長男ということで、進学もしないで就職の道を選んだ。もちろん、夢のために進学して少しでも知識を増やしたかったのだが、二人の弟のことを考えると、金銭的にもキツイことを知っていたため、泣く泣く進学は諦めたのだ。

しかし、進学しなくても夢は叶った。知識は研修でなんとか納し、今までの経験も生かしてやってきた。

進学のことでも多少の後悔はあるが、これで良かったのだと自分を納得させてきた。

「今から通えば？」

和明は冗談まじりで言った。

「もう少し若ければ通うつもりやけど、年齢が年齢だしな」

「今から通えば二十代後半か。まだまだ若いと思うけどな」

「もし、進学するなら専門かな。今の職からすると、専門が妥当だろうな。これから先の人生、始めて遅いってことはないけど、オレはこのままでいいかって感じた」

友明は笑顔で言った。

翌日の午前中、宏明は部屋の片付けをし、午後からはゆっくりする予定でいた。

自分の部屋は予想以上に汚れていて、呆然と立ち尽くす宏明。普段は気にならないのだが、改めて片付けてみると、大学で使用していたプリントやテスト勉強をやっていたルーズリーフなどが、机から沢山出てくる。

いらぬ物は捨てているはずなのに、どこからこんなに沢山あるのだろうと不思議に思ってしまう。

——こんな一日で終わるか？ あーあ、ゴミって知らない間にたまってしまふもんだな。

途方に暮れながら、ゴミ袋にゴミを捨てていく。

その中に、吉田先生が宏明のたもに書いてくれたメモが、宏明の目

に止まった。そのメモには、“頑張るんだぞ！”と一言書かれているのに、宏明は胸を痛めた。

——吉田先生が亡くなって十日程になるんだな。あっという間だった。短い間だったけど、吉田先生だって教師の夢は叶ったんだし、オレも頑張らないとな。いつまでも落ち込んでてもダメなんだよな。吉田先生からのメッセージを微笑みながら思う。

吉田先生が亡くなったあの日は、心境が全く違うものになっている。今なら吉田先生とのことは、笑って思い出としてやっていける。目標としていく人がいないなんてことはない。今まで通り、吉田先生を目標としていけばいいんだ。

メモを眺めつつ、いつものようにヤル気を取り戻していく。

国語の教師になりたい、という気持ちは、間違いなく宏明の中で存在している。

現在、三回生の宏明は、来年には就活が始まってしまう。

教育実習にも行かなくてはいけないし、もし、国語の教師になれなかったために、他の職に就くことも視野に入れて考えなくてはいけない。

とにかく、来年、四回生になると、今まで以上に目まぐるしく毎日が過ぎていくに違いないのは確かである。

——気合い入れていかないと。来年は今まで以上に忙しくなるし……。

宏明は吉田先生が書いてくれたメッセージのメモを、愛用のクリアファイルに入れた。

昼食を入れて、午後二時半過ぎ、やっと部屋が片付いた宏明は、マグカップにコーヒーに注いで、部屋でゆっくり過ごすことにした。今日は今年最後の日だというのに、二葉家は普段と変わらないでいる。父と二人の兄は、買い出しに行っていて、母と二人きりだ。

最近、母はストレスがたまっているのか、イライラしていることが

多くて、なんとなく避けてしまっている。それは、宏明だけで、他の家族はそんなふうに思っていないようだ。これはいつも感じている親の愛が感じられずにいるのも関係しているのかもしれない。

一度、高校の時に母とケンカしたことがあった。その時に言われた言葉が、宏明の胸の中にずっと残っている。

：どうやったらアンタみたいな子が育つのかわからない。友明と和明と同じ様に育てているのに…。

こんなことを言われたらどうしていいのかわからない。

少しくらい個性を認めてくれてもいいのに、どうしてこんなに世間体を気にするのか。兄弟はいつまでも同じじゃいけないのか。それに、自分は兄と何が違うのか。それらをずっと疑問に思っていた。ケンカの弾みで言っただけで、本心ではないかもしれないが、宏明にとつて胸に突き刺さったし、兄弟がいつまでも同じだなんてとんでもない。

一人一人違うから個性が引き立つのであり、やりたいこともそれぞれ違うのである。全員同じで、同じ様にしなくちゃいけない。これじゃあ、まるでロボットである。

それに、兄二人と比較されても宏明は宏明でしかないのである。常に三男の宏明は、比較ばかりされてきた。正直、ウンザリしているが、どこもそうなのかもしれないと納得させて、今までやってきた。

それに控え、父は二葉三兄弟を平等に接してきたが、どこか兄二人と違っていた。どこかとははっきり言えないが、なんとなくで兄二人と自分は何かが違うんだと感じていた。

「宏明、入るぞ」

父が宏明同様、マグカップにコーヒーを入れてやってきた。

「もう帰ってきたのか」

「ついさっきな。年末だからどこも人が多くて大変だったよ」父はマグカップを宏明の机に置き、伸びをしてから答えた。

「年末はどこも忙しいもんだよ。オレもついさっき、部屋の片付け

が終わったとこだ」

「どうりで…。なんか綺麗になってるなと思ってたんだ」

父は部屋を見回す。

「そういえば、三人で暮らしたいとか言ってるみたいだか…。友明から今朝聞いたよ」

「ああ、そのことか…」

父の口から昨夜の話が出た瞬間、“もう話したのか”と思った宏明。
「今朝ってことは、朝食の時？」

「ああ…。宏明はまだ起きていなかったからな」
「コーヒ―をすすりながら答える。」

休みの日の二葉家の朝食時間は午前八時だが、この時宏明はまだ起きてはいなかった。宏明が起きた時間は、八時半過ぎだったため、友明の話は聞いていない。

「はつきりと理由は聞いてないが、別に三人で暮らさなくてもいいんじゃないのか？ 一度は一人暮らしをやってもいいと思う。でも、何も三人で暮らさなくてもいいんじゃないのか？」

「それもそうだけど、一人暮らしだとなんだかなあ…。って感じなんだよな」

頭をかく宏明。

「上二人は働いているから十分やっていけるけど、お前はまだ学生じゃないか」

父は宏明が兄と一緒に暮らすのは反対しているようだ。

「そんなこと言ったって、下宿してる奴もいるさ」

「それは地方から来ているわけであって、地元に住んでいるお前とは理由が違う」

「オレだって一度は親元を離れて暮らしてみたい。別に友達と暮らすってわけじゃない。まずは兄貴達と暮らしてみて、それから一人暮らしをしたいんだ」

宏明の決心は強い。

両親は宏明が何かしようとする、すぐに反対するのだ。

何度か泣く泣く諦めたこともあったが、今回ばかりは何があっても諦めることはしない。

諦めたら後悔してしまいうさなのだ。

「そうか。いつもなら言うこと聞くのに、今回はそうでもないんだな。それだけ宏明も大人になったってことだな」

父は遠い目をしながら言った。

「このことはお袋はなんて言っているんだ？」

「反対はしていない。アイツは若いうちからなんでもやっておけばいいっていうタイプだからな」

「お袋はチャキチャキしてるからねえ……」

宏明はしみじみ言う。

父のいうとおり、母は若い頃からなんでもチャレンジしている。留学、スポーツ、演劇……自分のやりたいことや興味を持ったことをやっている。

そういうところは、母に似ているな、とふと思う宏明。

「三人が暮らしたいって思ってるんだったら、出来るとこまでやってみろ」

「うん。やらなきゃわかんないしな」

「ま、友明がしっかりしているから大丈夫だろ」

父は長男の友明のことを一番信頼している。

——長男は大変だ。しっかりしないとダメだし……。でも、別に長男がっというのも変だけど、何も長男がしっかりしないといけないうっていう考え方はどうなんだろうな。

宏明はぼんやり思う。

父の考え方は古いのだ。

祖父の影響もあるのだろうけど、自分の子供に古い考えを押し付けるのはどうなのだろうと思う。

男は仕事だけすればいい。父はそう思っているから家のことは何もしない。だから、母がウンザリして、ケンカになる。

少し母の気持ちや母が文句を言いたくなるわかる気がした。

「何かあったら言ってくれ」
そう言うと、父は宏明の肩を叩いた。

古典文学の展示会

「えっ？ 家出てお兄さんと一緒に住む？！」

京子はカレーライスを食べていた手を止め、目を丸くして驚いた声を出す。

年明け最初の授業のこの日、宏明達四人は久しぶりに食堂で昼食をすることになった。

宏明は冬休みに兄と住むことになったことを話した。

驚いたのは京子だけではない。茂と紀美も驚いている。

「うん。今のところ、大学近くの駅に住む予定。今のバイトは続けるつもり。バイクで十五分くらいだしな」

宏明はお茶をすすりながら話す。

「なんで三人で暮らすんだよ？ 実家で親と暮らすほうがいいのに

…」

茂はよくわからない表情をする。

「まあ、色々あってな。三人で暮らすうって言い出したのは、すぐ上の兄なんだ。なにげに言ったんだと思うんだけど、それが話が大きくなって、三人で暮らすってことになったわけ」

「ヒロってお兄さんと仲良いよね。男兄弟って羨ましいって思っちゃう。私、お姉ちゃんと二人姉妹だけどケンカしたら凄まじいことになるんだよね」

宏明を羨ましげな表情で見る京子。

「ケンカの際は凄まじいけど他は仲良いよ。私も男兄弟欲しかったな」

「ホント、京子って欲しい物いっぱいあるな。ついこないだは、チワワ欲しいって言ってなかったっけ？」

茂は若干引き気味だ。

「チワワはチワワよ。いいな、いいな。私も男兄弟欲しいな」

「そんなこと言ったってな―…」

宏明も引き気味で、なんとかしてくれという助けの目を紀美に向けた。

宏明と目が合った紀美は、宏明の気持ちを読み取り、

「京ちゃん、あんまりそんなにいいなばかり言ってちゃダメよ。でも、思ったことをすぐにいう京ちゃんは大好きよ」

やんわりと言った。

「ありがとう。ヒロ、マンションはどうするの？ 三人分の個室も必要だし…」

「そこが問題なんだよなあ…。最悪の場合、三人同じ部屋ってことも考えないとな。多分、春ぐらいになると思う。兄貴達は働いてるし、休みの日じゃないと探せねーし。オレだって来月上旬ぐらいまで学校で忙しいからな」

宏明はいつもよりゆっくりとした口調で言った。

三人の休みがある日がじゃないと探せない。

家賃のことも考えなくちゃいけないし、兄弟といえどもお互いのプライベートを立ち入るのは嫌だし、部屋を探すのに慎重になりつつ、二人の兄の意見を取り入れなくてはいけない。

部屋が借りられるまで気が抜けない宏明は、自分達が出ていった後の両親のことが気がかりだ。自分達がいらないことで、夫婦ゲンカが今まで以上に増えてしまうのではないか、と思ってしまう。宏明がそう思っている、夫婦間の問題である。

「マンション決まったら住所教えてね。私、遊びに行く」

紀美は笑顔で言う。

「オウ！ 紀美には一番に教える」

宏明は紀美の部屋を撫でながら言う。

「羨ましいねえ…。二人きりの時だけにしてよね、イチャつくのは…」

京子は呆れた表情をしながら、宏明と紀美を見る。

「別にイチャついては…」

宏明は顔を赤くする。

「ま、いっか。次の授業の教室行こう」

授業が始まった週の土曜日、宏明は茂と他の男友達と共に、古典文学の展示会へと向かった。必修科目である教科の教授が、“古典文学の展示会のことをレポートしてこい”と言われ、同じクラスの友達と行くことになったのだ。

受付で入場料を払い、パンフレットを受け取って中を見ることになった。

「ここの入場料高くない？」

宏明の友達のうちの一人、辻井という一番背の低い男子が言った。

「確かに…。900円なんてオレら学生にとっては痛手だぜ」
茂も同感しながら言う。

「たかがレポート書くだけなのにな」
もう一人の友達、松川というスポーツマンタイプの男子が、かったるい口調で言う。

「そうそう。なんでこんなメンドーなことさせるんだよ？」

「テストが始まる前に、ってことだろ？」

宏明は展示物を見ながら、辻井に言う。

「テスト前にやられるよりかはマシだけどさ。レポートなんてヤル気起きねーな。書きたくないなあ…」

松川はあまり展示物に目もくれずに、伸びをしながら言う。

「ここらこら：真面目に見なさいよ！」

四人の背後から若い女性の声がした。
振り向くと、スレンダーで美人な女性が立っている。

「げっ?! 姉ちゃん?!」

辻井が声をあげる。

「姉ちゃんって…辻井の姉さん？」

宏明は辻井を見る。

「あ、うん、そうだよ」

辻井は気まずそうな表情をしている。

「ふーん：美人だな」

茂は辻井を肘でつつく。

「姉ちゃん、恥ずかしいから向こう行けよ」

「嫌だ。私が案内してあげるから：」

「ここで働いてるんですか？」

「そっ。少しだけなら時間あるから、案内出来るわよ。私は光恵。

よろしくねっ！」

光恵はウィンクをしてみせる。

「何、ボケーツとしてんの？ 早く行くわよ！」

サクサクと歩いてしまいう光恵の後に続く四人。

「四人共、文学部の国文科だから大体のことは知ってると思うから簡単に話すわね。平安時代の男性の服装が束帯、女性の服装が十二単なの。男性の束帯は、貴族の正式な装束で、儀式に用いられていた。裾、つまり着物のすそのことだけど、官位が高くなるにつれ長くなり、大臣で約3mもなるの。袍、上着のことね。色や服地、文様など官位によって定められていたのよ」

光恵は束帯を身にまといっているマネキンの前で四人に説明する。

——授業より詳しいな…。

感心していた宏明。

「貴族にも平服ってのがあって、直衣と狩衣の二つ。直衣は天皇の許しにより参内する時も着用出来て、狩衣は直衣よりも下。元来、狩猟の際に用いられたのよ」

光恵の説明に、ノートにメモする四人。

「次は十二単ね。内裏に仕える女房達が用いた正式な装束。十二単は江戸時代からの俗称で、十二枚重ねるって決まってたわけではな
いらしいのよ」

「へえー：そうなんだ。てっきり十二枚着てるのかと思ってた」

松川が知らなかったという表情をした。

「襲^{かさ}ね色目ってのが発達していて、衣の表と裏の配色のことで、四季の自然美との調和が重んじられていた。服装のことはこれくらいね」

そう言うのと、光恵は次へと歩いていく。

四人も急いで、光恵についていく。

「古典文学の舞台ね。古典文学といえば平城京。右京は低湿地のため^めにさびれ、左京の北方を中心に発展し、人口は十五万人に達したんだけど、平安時代中期には荒廃していったの。『今昔物語』の説話^{せつわ}に題材を求めた芥川龍之介の『羅生門』に描かれていたのよ」
一気に説明する光恵。

「ざっと簡単に説明したけど、どう？　少しは参考になったかな？」

「はい、参考になりました」

代表で茂が言う。

「良かった。私、そろそろ行くけど弟のことよろしくね」

「あ、はい」

「もういいから、早く持ち場につけよ」

辻井は照れながら、光恵に言った。

「はいはい。じゃあ、またね」

そう言うのと、光恵は自分の持ち場へと戻って行った。

「お前の姉さん、綺麗だったな」

松川はニヤニヤしながら辻井を見る。まるで紹介してくれよという表情だ。

「オレらより二つ上だ。まあ、姉ちゃんは昔からモテてたけどな」

「彼氏いんのかよ？」

「多分、いないと思う。紹介して欲しいのかよ？」

「べーつつに…」

辻井はニヤニヤしている松川を呆れ顔で見る。

「ホント、松川は女好きだな。あまり色んな女性にテ出しすぎるなよ」

茂も呆れ顔だ。

「ヒロみたいに一途になれよな」

「オレは一途じゃないって…」

宏明は頭をかき苦笑する。

「オレはヒロみたいに一途じゃないんだよ。すぐに気が変わりやすいんだって」

松川は開き直る。

「いいんじゃない？ 姉ちゃんのこと考えておいてやるよ。とにかく、ご飯食べに行こうぜ！ 早いうちにレポート書こう。せっかく姉ちゃんが説明しに来てくれたんだからさ」

「そうだな。どこ行く？ どうせならゆっくり出来るところに行こうぜ！」

茂は三人に笑いかけて言った。

紀美の不安な気持ち

夕暮れの放課後、宏明と紀美は図書館でレポートを書いていた。前の古典文学についてではなく、別の内容のレポートだ。

翌日の二限目の授業に提出するレポートで、ぎりぎりまでやっていなかった二人は、まさしく今、急いで書いている最中だ。

ちょうど二人共バイトがなかったため、二人でやろうということになった。

午後四時半の四限目の授業が終わってから、既に一時間半近くが経とうとしている。二人は何も話さず、黙々とレポートを書いている。こんなことになるのなら、もう少し早くレポートを書いておけば良かったと後悔している二人。

それから、二十分後、二人はやっとレポートを書き終えて、図書館を出た。

「あー、やっと終わったー」

宏明は伸びをしながら言った。

「宏君、ご飯食べて帰ろうよ」

「そうだな。何食べる？」

「なんでもいいよ」

紀美は宏明の腕に自分の腕を絡め、幸せそうな表情をしながら歩く。

「あのっ…サイン下さいっ!!」

前から一人の女子生徒が、宏明にサインを求めてくる。

「ああ、いいよ」

気軽にサインに応じる宏明。

痴漢騒ぎ以来、宏明にサインを求めてくる女子生徒が多数いるのだ。何度か紀美の前でも女子生徒が来るが、宏明は気にも止めずにサインをしている。

そんな姿を見て、紀美はヤキモチを妬くこともあるが、口には出さずにいるのだ。

宏明はサインを書き終えると、色紙を女子生徒に渡す。

「ありがとうございます」

色紙を手にニッコリ笑顔で、礼を言う女子生徒は、二人の前から去る時、紀美を睨んで行ってしまった。

——睨まれちゃった…。

走っていく女子生徒の後ろ姿を見つめ思う紀美。

「さっ、行こう。オレ、腹減ったな—」

宏明は紀美の手を取って歩き出した。

それから三日が経った。レポートはなんとか提出が出来た宏明と紀美は、内心ホッとしていた。

三日前にサインをくれと言って来た女子生徒は、教室の移動中の廊下で会うと睨まれる紀美は、なんともいえない気持ちになっていた。——あの娘、宏君のこと好きだよ。私と付き合ってるから嫉妬してるんだよね。あの娘の気持ち、わかる気がする。私も宏君と付き合いあっていつも不安だもん。宏君、モテるから…。

カフェでホットココアを前にため息を何度もつく紀美。

「ノンちゃん」

「え、うん」

京子の声で慌てて反応する紀美。

「どうしちゃったのよ？ 二、三日前から変だよ？」

「なんでもないの。ホントよ」

「ふーん…考え事するの好きだねえ、ノンちゃんは…」

一応、納得した京子は、紀美の顔をまじまじと見た。

「な、何?! 私の顔に何かついてる？」

「ううん。ノンちゃんて年齢の割には幼い顔してるよね」

「童顔って言いたいんでしょ？」

「まあ、そういうこと。ヒロは童顔好きなのかねえ…」

京子は腕組みし、深くイスにもたれかかる。

確かに言われてみればそうだ。大学内には大人っぽい、年齢より上に見える女子生徒はたくさんいる。

今までそんなことは気にしなかった紀美は、京子の一言で首を傾げる。

「さあ：タイプは人それぞれだから：」

「そうよね。ヒロって意外とロリコンかもよ」

京子はニヤリと笑って言う。

「絶対にそんなことないよー。京ちゃん、ヒドーイッツ！！」

「冗談よ！」

京子はおもしろおかしく笑う。

そんな様子を三日間にサインを求めてきた女子生徒が見つめていた。その視線に気付いた紀美に、目を反らす女子生徒。

「京ちゃん、あの娘、なんて名前か知ってる？」

紀美は友達と話すサインを求めてきた女子生徒のことを話す。

「知ってるよ。かよちゃんでしょ？」

「かよ：ちゃん：？」

「うん、川上かよちゃん。二回生で書道のサークルで一緒なの。かよちゃんがどうかした？」

「ちよつと、ね：」

首を横に振る紀美。

「何よー？ 教えてよ。友達じゃなーい」

京子は頬をふくらませる。

意を決した紀美は、三日間からの出来事を話した。

「へえ：かよちゃんがねえ：」

話を聞き終えた京子は、そつとかよを見た。

京子が教えてくれたかよという女子生徒は、モデル並に背が高く、巻き髪で服装も大人っぽい、いわゆるお姉系と呼ばれる部類だ。

「美人だね」

ボソッと呟く紀美。

「きつと、ヒロのこと好きなんだと思うよ。かよちゃんがヒロに告

るにしても、ノンちゃんは堂々としてればいいんじゃない？ ノンちゃんはヒロの彼女なんだし…」

落ち込んだ様子の紀美に、前向きになるようにアドバイスする京子。

「そうだよね…」

「かよちゃんは意地悪なこと言う娘じゃないと思うけど、もし何か言われても気にしちゃダメよ」

「うん、ありがとう、京ちゃん」

今にも泣き出してしまいそうな紀美は、精一杯の笑顔をした。

「ねえ、別れてくれない？」

そっけない言い方のかよ。

そんなかよに戸惑う紀美。

翌日の昼休み、紀美はかよに呼び出されたのだ。

「あ、あの…別れるって…」

どう言っているのかわからない紀美。

昨日、京子に何を言われても気にするなと言われたばかりだが、実際そういう場面になると、気にするなというほうが無理だ。

「私、二葉さんのこと好きなのよね。いつまでも片想いでいるのは嫌だから別れて」

はつきりと紀美に向かって言うかよ。

何も言い返せないでいる紀美。

——急にそんなこと言われても…。

「あなたが別れるつもりがないなら、二葉さんに直接言ってもいいのよ。いつかは告るつもりだし…」

「私、別れるつもりなんです。それに宏君だって…」

やっこの思いで言葉が出た紀美は、声が震えている。

「じゃあ、告るわ。あなたのことフルの時間の問題…」

そう途中まで言いかけたかよの言葉をさえぎるように、

「紀美にそういうこと言わないでもらえるかな」

二人の近くから宏明の声が聞こえてきた。

紀美があたりをキョロキョロしていると、少し離れた場所で宏明が壁にもたれていた。

「宏君っ！」

紀美は宏明にすぎるような目で宏明のほうを見た。

かよはバツが悪そうにしている。

「オレ、そういうの嫌いなんだよな。だから、今後一切、紀美に別れてくれとか言わないで欲しい。それに、無理矢理、オレと付き合おうなんてことも考えないで欲しい。強引に付き合おうってしたら、男に嫌われるぞ」

宏明はキツイ口調でかよに言った。

「わかったわよ！ 諦めてあげるわよ！ それでいいんでしょ?!」
かよはムツとした口調で言う、プリプリしながら去って行った。

「ありがとう、宏君。急にあんなこと言われてビックリしちゃって…」

紀美は心臓が高鳴っているのが、自分でもよくわかる。

「ごめんな。オレのことで別れるとか言われて、紀美に嫌な思いさせてしまつて…」

宏明は頭をかきながら言う。

「いいの。宏君が謝ることないんだって。でも、なんでここが…?」

「一緒にご飯食べようと思って、紀美がいなくて探したら、あの娘と一緒にいる紀美を見つけたってわけだ」

「そっか。ホントにありがとう。宏君が来てくれなかったら、あの娘にメチャクチャに言われてたもん」

紀美は目に涙を浮かべる。

「いや、いいんだ。実は昨日、このことで京子からメールが来たんだ。だから気にしてたんだ。オレのことで何か言われたら、すぐに言ってくれたら良かったのに…。一人で悩んで…バカだな」
そう言う、宏明は紀美を抱擁した。

「あ、あの…宏君…学校だよ…? 恥ずかしいよ…」

紀美は顔を赤くして言う。

「あー、スマン。そうだったな。学校だって忘れてた。今から学食に行こう。早く行かないと昼休み終わってしまう」

宏明は紀美の頭をくしゃくしゃになでた。

二人の気持ち

その日の放課後、宏明は紀美と共に、宏明の最寄りの駅からすぐのところにあるデパートへと出掛けた。

昼休みの出来事があったせい、紀美はなんだかぎこちない。手をつなぐのでさえもためらってしまう。

その後、紀美は宏明が抱擁したせいで、午後の授業は真面目に教授の話を聞いて、授業を聞いているどころではなかった。昼間から、しかも誰かに見られていたかもしれないと思うと、授業に専念出来なかったのである。それに、友達とか知っている人が見ていたら：と思うと、気が気ではない。

——私を安心させるためのものだったんだろうけど、やっぱり宏君は優しいよね。それにしても、恥ずかしかったな…。

紀美は歩きながらふと思う。

午後の授業の間、紀美の脳裏の中で、昼休みの出来事が何度もリピートして蘇ってくる。

当分、いや、一生忘れることはない出来事であろう。紀美にとってそれくらい衝撃だったのだ。

「…紀美？」

宏明が紀美を呼ぶ。

「え、あ…」

自分の目の前に宏明がドアップで写り、驚いてしまう紀美。

「何度も呼んでるのに…。まったくボーッとしちゃって、ノンちゃんでやーねえ…」

宏明は京子の真似をしながら言う。

京子と同じ口調を宏明がするため、思わず笑ってしまう紀美。

「ククク：宏君ってば京ちゃんの真似しちゃって…。なんか、キラ変わるってー」

「やっと笑ってくれた。あの娘に言われたこと気にしてたせいもある

って、元気なかったからな。まあ、今のはオレなりに元気づけようとしてたんだ」

宏明は顔を赤くさせながら言う。

「ありがとう、宏君。心配かけちゃってごめんね。明日、京ちゃんにもお礼言わなきゃ」

「じゃあ、今から京子に何かプレゼント買う？」

「うん！ 京ちゃん、お風呂セットが欲しいって言ってたから、お風呂セットをプレゼントしてあげようよ」 紀美は前に京子が言っていたことを覚えていたのだ。

「お風呂セットってどこで売ってるんだよ？」

「雑貨屋さんに売ってるよ。安いので500円くらいかな。物によつては、けっこういい物が入ってるんだよ」

「雑貨屋さん……。ああ……。そういえばあったな、そんな店……」

デパートの中に雑貨屋があったのを思い出していた宏明。

店の前を通ったことはあるが、女の子向けの店のため、今まで一度も入ったことがなかった。

「どんなのがいいかな。色んなのがあるからね。色はピンク以外でいいよね？ 京ちゃん、ピンクはあまり好きじゃないって言ったし……」

「そうだな。どんなのかは店に行ってからでもいいんじゃない？」

そう言うと、宏明はデパートの駐輪場にバイクを置いた。

二人はデパートの中に入ると、すぐに雑貨屋さんに向かい、千円程のお風呂セットをかうと、最上階にある食堂街に行った。その食堂街の一つの店に入った。

「京ちゃん、喜んでくれるかな？」

紀美は可愛らしく包装されたお風呂セットを見ながら言った。

「喜んでくれるだろ？ 自分の欲しい物だし……」

おしぼりで手を拭きながら言う宏明。

「そうだね。：ねえ、宏君：宏君はどうして京ちゃんのこと、京子って呼び捨てにするの？」

突如、紀美は真顔で聞いてきた。

「なんでって：」

答えに困る宏明。

「いや、あの：なんていうか：」

「あ、ごめんね。変な質問しちゃって：」

紀美は慌てて謝ると、下を向いてしまう。

今日一日で色んなことがあったせいかな、京子のことをなぜ呼び捨てにするのか気になったのだ。

「女友達の一人だからな。紀美と付き会う前から仲良かったし：」
ここはきちんと答えなくては、と思い、宏明は答えた。

「紀美の気持ちはわかる。今日のことがあったから、不安になってるんだろ？」

宏明の質問に、コクリと頷く紀美。

「京子のことを呼び捨てにしてるからって、京子とは何もない。わかってるだろうけど：」

きっぱりと言う宏明。

宏明と紀美が知り合ったのは、一回生の前期だった。元々、京子と入学と同時に仲良くなったのだが、紀美とは顔を知っている程度だった。

そして、ゴールデンウィークが終わった五月中旬、宏明や茂の男友達や京子の女友達、計十三人と遊びに行くことになった。そこに京子の友達の一人として紀美がやってきた。

一見、大人しそうだが、話してみると将来の夢など自分をしっかり持っている紀美に一目ボレした宏明は、猛アタックの末に七月下旬、テスト終了後に付き合うようになったのだ。

実はというと、その前に京子に告白されていたのだが、宏明は“今好きな娘がいて、京子の気持ちには応えてあげられない”と、少し申し訳ない思いで言ったのだった。

後に京子に紀美のことが好きだとわかってしまい、付き合うまで冷やかされてきたのはいうまでもない。そして、紀美と付き合うことになった宏明は、大切にしたい、辛い想いをさせたくないという気持ちからか、何かあればすぐに言ってくれ、と紀美に伝えたのだった。

「でも、こうやって言ってくれるほうが、オレは嬉しい。これからも言っていて欲しい」

宏明は笑顔を向けて紀美に言った。

「私もどこか悪いとこがあったら言ってよね」

「紀美の悪いとこなんてねーよ。むしろ、オレのほうが悪いんだって。紀美のこと不安にばっかさせてるし…」

「ううん。不安になるのは辛いけど、そのほうが絆が強くなることない？ ケンカしたりとかさ」

紀美はさっきの真顔から、なんとなくホッとした表情になっている。本当のところ、不安になりたくはないけど、恋だけじゃなく何事にも不安な気持ちはつきものだということは、紀美にもわかっているため、さっきのようなことを言ったのだ。

「そうだな。あまり我慢はしないでくれ。紀美は今日のあの娘のように我慢することがあるから…。京子からのメールでビックリした」

宏明は京子からのメールを見た時の心境を紀美に伝えた。

「別れてって言われるまで睨まれてただけだったし、今日みたいなことがあるなんて思わなかったんだもん。睨まれてるだけで何かされたり言われたりなんてことないからいいかって思ってたんだもん」

紀美はアハハ…と笑ってみたりしながら話す。

「バカ。何考えてるんだよ。睨まれてる時点で、紀美に敵視してるのまるわかりだろ？ 早く気付けよ」

宏明は呆れ返ってしまう。

「だって、宏君のファンとしてサインもらってて、好きなんだな—ってことは気付いてたけど、まさか別れろって言われるなんて思ってたなかったんだもん」

「まあ、そりやそうだけど…紀美って鈍感だな」

宏明は苦笑するしかない。

そんな宏明の様子に、紀美も苦笑してしまう。

「オレはそういう紀美が好きだけど…」

宏明はボソッと独り言のように言った一言に、

「私も宏君好きよ」

顔を赤くさせながら、宏明をまっすぐ見つめて紀美は言った。

「あのさ、思ったんだけど、なんかオレって人目を気にせずに好きとか言ってるよな」

宏明は急に自分の行動が恥ずかしくなってくる。

たまに見境もなく行動することがある。

「それが宏君のいいところだと思う」

「紀美のように言ってくれる人が多いけど、中にはウザイって言う人もいるんだ。ウザイって言われてもオレはオレだしな」

そう言うと、宏明はグラスに入った水を飲んだ。

ウザイと言われたのは、高校一年の時だ。

真面目で成績優秀な女子から、「二葉君、前から思ってたんだけど、はつきり言ってウザイのよ」と、嫌味のように言われ、まるで扱いにくい人間のような目で見られたのだ。

その言葉にめげずに今までやってきたのだが、たまに自分はそんなのかな、ウザイのかなと思うことが時々ある。

「人それぞれ見方は違うし、あまり気にすることは無いと思う。言う人は言う。そういうことよ」

「まあな。世の中、自分と同じ考え方の人ばかりじゃない。色んな人がいるってことか」

宏明は神妙な表情で言うと、何かを考え込むように紀美を見た。

設定してくれた同窓会

日曜の雨が降る午後、宏明は茂に呼び出され、茂の最寄りの駅までやってきた。

約束の時間は午後三時半だが、すでに十分は過ぎていて、茂は一向に姿を表さない。

――茂のヤツ、遅いな。自分から呼び出してなんだろう…？

そう思いながら待つ宏明。

それから、五分後に茂は待ち合わせ場所へとやってきた。

「茂、遅いぞ！」

しびれを切らした宏明は、少し怒り気味だ。

「スマン、スマン。ちよっと手間取ってしまっただけ」

悪びれた表情をしながら、淡々とした口調だ。

「手間取ったってなんだよ？ お前、何企んでるんだよ？」

何がなんだかわからない様子の宏明は、茂の言ってる意味が全くわからない。

そんな宏明の様子を見て、茂は不敵な笑みを浮かべている。

「まあ、オレについてこいよ。さっ、行くぞ」

そう言うと、茂はさっさと歩いていく。宏明も何もわからずに茂のあとを追いかけて歩く。

バスに乗って十五分、二人は茂の家の近くにあるバス停で降りた。

茂は自分の家とは反対方向へと歩いていく。

「オイ、茂、どこ行くんだよ？」

「うん、ちよっとな…」

「ちよっとなって…オレ、全然何がなんだかわかんねーよ」

宏明は自分に降りかかる何かに、一抹の不安を覚えた。

「着いたらわかるって。そんなに心配することはない」

そう涼しい表情をしながら、茂は歩いていく。

そして、歩いてすぐにカラオケ店に着いた。店内に入り、二人は一

室に入った。

「あ、ヒロ！ 久しぶりー！！」

部屋にいた全員がこっちを向き、クラッカーの紐を引いた。大きな音で驚く宏明は、一瞬わからず立ち尽くしてしまい、どこかで見た知っている顔ぶれに目を丸くした。

「あー！！ お前らどうしてここに…？」

「茂が計画してくれたもんや。成人式の同窓会の時、仲良かった仲間だけでやろうってことになってたのに、ヒロだけ来なかったもんだから、いつかヒロを驚かせて会っちゃおうってなったわけ」

二人の友達の一人が、笑顔で言った。

「それでか。茂、そうならそうと言えよな。何も言ってくれないからビックリした」

宏明は感激しながら茂に言う。

「ヒロを驚かせようとしてたから言わなかったんだよ。さあ、立ってないで座ろうぜ！」

茂は中に入りイスに座る。

宏明は久しぶりに高校時代の友達に会えたことが、すごく嬉しかったのだ。同窓会の時、なぜ行かなかったのかというと、その日は成人式の後に用事があったのだ。別に行きたくない、という理由からではない。

「今、サークルとか入ってんのか？」

「いいや、入ってない。大学入ってまでいいかと思って…」

コーラが入っているコップを片手に答える宏明。

「珍しいねえ…。ヒロはなんでもやるイメージがあるから…」

「そんなイメージ、ぶち壊してくれよー」

「ぶち壊せて言われても、オレらの中では正義感溢れるヒロっていうのがあるからな」

そう言うと、友達の一人はタバコに火をつけた。

——未だにそんなイメージがあるのか…。そのイメージをみんなの中から取り除いて欲しいな。オレはただやりたいことをやってるだ

けなのに……。何も特別なことはしてないのに……。

友達が騒いでいる姿を見ながら思う宏明。

——実際、イメージを壊すなんて無理か……。そう簡単に壊すなんて出来ねーからな。別になんでもやるイメージのオレでいいか。

久しぶりに会った友達なのに、なぜか深くため息をついてしまう宏明。

「ヒロ、何か歌えよ。せっかくヒロがメインなのに……」

宏明の前にカラオケの本とリモコンとマイクがくる。

「えーっ、オレ音痴だって——」

「そんなことないじゃん？ 学祭の軽音のミニライブで飛び入りで歌った時に、ヒロの歌声良かったじゃん。生徒どころか先生達にも好評だったじゃん」

さっきとは別の友達が高校時代のことを話し出す。

「そうそう。“さすが、生徒会長！ なんでも出来るね” って言われてたしな」

「そういえば、そんなこともあったな。軽音のミニライブに出ることになったのは予定外だった。とりあえず、一曲歌うな」

宏明はまいったなという表情をしながらも、カラオケの本に手を伸ばす。

高校三年の学園祭の最終日、午後の部で野外で行われた軽音のミニライブに、急遽出演することになってしまった。その日の午前に聞かされた宏明は、急いで自分が歌いたい曲目を伝えた。一曲だけだったけど、ちょうど軽音のミニライブを見に来ていた教師や生徒から、宏明の歌声を絶賛したのだった。

それから、宏明がボーカルで一回限りのライブを行ってくれ、という声が上がってきたのだが、宏明自身はそのつもりはなかったため行わなかったのだ。

たった一度だけ、しかも一曲だけのためにステージに立ったただけなのに、こんなに大きく反響が出るとは、宏明は思ってもみなかった。周りからはなんでやらないんだ、という声が多く、戸惑う宏明だった。

たが、友達がやって欲しいという人達に対して、ヒロにそういうことを言わないでくれ、と言ってくれたのだった。それが今いる友達なのだ。

勿論、宏明もオレだけのライブをやるつもりはない、と言い続けてきたのだが、回りは聞くはずもなかった。軽音の部員からは、「演奏のほうは大丈夫だから、一度だけでもライブをやってみないか」と、声をかけてきてもらったが、それも断ったのだ。

卒業までやらないと貫き通したが、別に嫌がらせを受けたとかそういうことはなかった。

自分の歌声をいいと言ってくれた人達のために、ライブをやったほうが善かったのかなと思うことが時々あるが、やらないと決めたのは自分だから、これでいいんだと思っている。

「相変わらず、歌上手いな。やっぱ、あの時、ライブやったほうが良かったかもな」

宏明が歌い終えた後に、田中が言った。

「それはな。まあ、いいんじゃない？ あの時はおれらだってヒロのためにやらないって言ってたんだし……」
茂も同感しながら言う。

「オレだけ特別になってわけにはいかない。オレが軽音に入ったらライブをするけど、軽音に入っていないのにライブをするなんて変だろ？ それで、ずっと断り続けてたってわけだ」

宏明はあの頃のことを語る。

「ヒロは陸上部だったからな。それに、男前だからなんでも出来るみたいに思われてたところがあつたからな。特に女子なんて、ヒロと接する時とか全く違ったもんなー」

「あー、それは言えてた。オレ、ヒロが羨ましかったぜ」

「羨ましい……？」

「うん。何やっても注目されるし、嫌味なことは一切言わないし、ヒロとみんなは何が違うんだろう？ って、ずっと思ってた」

友達の中で一番大人しい川上が、遠い目をしながら言う。

「何が違うって言えないけど、オレはみんなみたいに普通に生きてきたつもりだ」

「それもそうか。久しぶりに会ったんだからパーツといこうぜ！」

山川が明るい声で言った。

「そうだな。じゃあ、次、オレ歌うな」

茂が曲選びに取りかかる。

そんな時、宏明の部屋がなんとなく騒がしい。何があったんだろう？と宏明が思った瞬間、部屋のドアが勢いよく開き、背広を着た男性数人が入ってきた。

「田中勇輔だな。ちよつと署に来てもらおう」

一人の恐面な男性が、警察手帳を見せながら、田中に話しかける。その場にいた全員は、何がなんだかわからない様子でいる。

——何が起こったんだ……？ 一体、なんなんだよ？

宏明も目を丸くしながら、事態を見ているだけだった。

衝撃な事実

宏明達がカラオケ店の一室では、さつきよりさらに騒がしくなってきた。宏明達は田中がどうして警察に連れていかれるのかわからないのに対して、田中は理由がわかっているのか、オロオロしている。

「刑事さん！ 急に入ってきてなんなんですか？！ 失礼じゃないですか？！」

山川は近くにいた恐面の刑事に聞く。

「理由は後で話してやるよ」

恐面の刑事が言うのと、田中を見た。

「さあ、行くぞ。連れていけ」

他の刑事に指示した後に、田中は刑事達と共に部屋から出て行った。

「これからどうするよ？」

茂が残った三人に聞いた。

「警察に行くしかないだろ？ とりあえず行こうぜ！」

川上が力強く言った。

四人はカラオケ店で会計を済ませ、署へと向かった。

四人の胸中は、なぜ田中が警察に連れていかれたのか。田中は何をしてしまったのか。そんな疑問が駆け巡っていた。

署に着くと、宏明が谷崎警部を呼んでもらい、会議室へと通された。少しすると、谷崎警部が部屋に入ってきた。

「警部、なんで田中が連れていかれたんだよ？ 田中が何かしたのか？」

最初に口を開いたのは、宏明だ。

「実は麻薬の取り引きをしていたんだ」

重々しく谷崎警部が口を開いた。

「麻薬？！」

四人はわけがわからない表情をする。

「ああ：一年前から田中が麻薬の取り引きをしている、とタレコミ

があったんだ。この一年、色んなところで田中がどんな奴かを調べていたんだ。それで、一ヶ月前に奴を偶然見かけて、しばらく泳がせていたんだ。なかなか奴が麻薬の取り引き現場に向かわないため、今日、突撃して本人に自白させようと思ったんだ。まさか、二葉君の友達だったとは…」

谷崎警部は全てを語ってくれた。

四人は自分の友達が、麻薬に手を出していたとは誰一人として思ってもみなかった。

「そういうことだったのか…。田中は逮捕されるのか？」

「自白して裏付けが出来れば、逮捕されるだろうな」

谷崎警部は深くイスにもたれかかりながら答えた。

そして、さっきカラオケ店で会った恐面の刑事が入ってきた。

「警部、ちょっと…」

「ん？　なんだ？」

谷崎警部は恐面の刑事に近付き、何かを話している。

話が終わると、恐面の刑事は四人を睨んで、会議室を出て行った。

「田中が自白したそうだ」

「マジかよ…」

田中が自白しないように、と願っていた四人の思いは、無惨にもぶち壊されてしまった。山川は頭を抱えてしまい、どうしたらいいのかわからない状態だ。

「自白したからって、友達の縁を切らないでやってくれ。中には、友達の縁を切られたっていう人も数多いみたいやからな」

「オレらは切るつもりもないし、切りたくない。田中がやったことはいけないことだけど、いい奴だもん」

宏明は自分に言い聞かせるように、谷崎警部に言った。

残りの三人も宏明と同じ想いだった。

署を出ると、四人は近くのファーストフード店へと入った。

「ごめんな。オレが久しぶりに会おうって言ったせいで、こんなことになってしまっ……」

茂は三人に謝る。

「気にすんなよ。茂のせいじゃねーから、責任感することないって……」

山川が優しい口調で、落ち込む茂をなぐさめる。

「そうだよ。でも、一年前から田中が警察に目をつけられていたとはな。しかも、麻薬の取り引きなんかしてたなんて……」

川上は意外だという口調だ。

確かに今までテレビで麻薬の取り引きなどで逮捕とか見たことはあったが、実際に自分の目の前で友達が刑事と共に、警察に連れていかれるとは思ってもみなかった。今回は逮捕という形ではなかったが、四人の心には嫌でも印象に残ってしまった。

「田中は麻薬の取り引きとかそういうことする奴ではなかったのにな。なんか、変わってしまったな」

山川はコーラを一口飲んでから言った。

「まあな。将来は医者になりたいって言ってたのにな。医大の受験を失敗したところから挫折したんだろうな。医大に落ちても、次の年に受験やり直せば良かったのにな」

宏明は田中が医大の受験を受験した時のことを思い出していた。

「受験に失敗したからって、人生が終わったわけじゃない。必ず、現役合格が目標じゃない。浪人して大学に入ってる人もたくさんいるからな」

続けて、宏明はうつむきながら言った。

「今日のことアイツらしいって思うな」

そう言ったのは茂だ。

「どういう意味だよ？」

「二年の二学期にタバコで停学になったことあったろ？ 真面目なところもあったけど、時々、不良っぽいところも見せる、どっち付かずの奴だったじゃん」

茂は昔を思い出すような遠い目をしている。

「そういえば、そんなことあったな。きっと、自分はどっちの自分なんだろう、と探してたんたんだと思う」

「今日のことはホントにショックだ。いくらなんでもオレらの前で、警察に連れていかなくてもいいのに……」

「取り引き現場できちんと言葉がある状態じゃないと困るよな」

川上の言葉に、複雑な気持ちになった。

谷崎警部の言うとおり、田中がなかなか麻薬の取り引きをしないために、強行突破で田中を署に連れていこうとしたのだろうが、いくらなんでも友達の前では酷である。きちんと言葉で押さえて欲しいものだ。何を考えているのか、と警察に文句も言いたくなる。

それに、あの恐面の刑事はあんなに偉そうなのか、宏明達にはわからないでいた。警官が谷崎警部のように、おっとりとした性格ではないとわかつているが、偉そうにされるとどう対応していいのかわからないくなる。

なぜ、他の部署である谷崎警部に報告くるのか、最初、理解出来なかったが、多分、宏明達が署に來ているのを知っていて、わざと報告しに來たのではないかと宏明は推測した。谷崎警部があらかじめ言ったのかもしれないが、それなら何も会議室を出る時に、睨まなくてもいいのである。

二人を見ると、谷崎警部より階級は下だと思われる。背は180cmぐらいの細身で面長で、年齢は三十代半ばぐらいだ。みるからに不健康そうな顔色は、宏明でさえも心配になってしまいうらいだった。

しかし、心配ばかりもしていられない。なぜなら、宏明はどうしても恐面の刑事が好きにはなれないからだ。

宏明は谷崎警部に田中のことを聞くついでに、あの恐面の刑事のことを聞いてみようと思っていた。

二日が経った。宏明は署の近くにある喫茶店に、谷崎警部を呼び出した。午後五時過ぎ、少し遅れてやってきた宏明は、谷崎警部に遅れたことを謝った。

「呼び出してスマン。どうしても聞きたいことがあってな」

宏明はウエイトレスにホットコーヒーを頼んだ後に、神妙な面持ちで言った。

「どうしたんだ？」

「田中のことなんだけど、どうしてる？」

率直に自分の友達のことを切り出した。

「ああ：元気にしてるみたいだ。出されたものはきちんと食べているし、供述もしていると報告を受けてる」

タバコを吹かしながら答える谷崎警部。

「報告って：あの恐面の刑事か？」

「そうだ」

「あの恐面の刑事って何者なんだよ？ オレら田中の友達だからって敵視してねーか？」

宏明は気になっていたあの刑事のことを、話の流れで聞いてみた。

「奴は小田といって、元は駐在をしてただけ、今から五年前にうちの署に配属になったんだ。部署は違うけど仲良くしてるよ」

宏明は考え込みながら聞いている。

「小田も二葉君のことを聞いていたよ。二葉君はどう思っているかわからないけど、同じ匂いがすると言っていたよ」

「同じ匂い：？」

宏明は自分の耳を疑った。

あの睨み方は、どう考えても同じ匂いを感じているといったふうには見えなかった。

「同類ってことだろう。二葉君のその態度からすると、小田のことをいいふうには見ていないようだな」

「オレはあの恐面の刑事のこと、好きになれない。カラオケ店でのことがあるからな」

頬づえをしながらの宏明。

「証拠もないし、麻薬の取り引き現場でもなかったからな。確かにあの状況では、二葉君達が怒るのは無理はない。スマンな」指示をしたのは自分ではないが、代わりに謝る谷崎警部。

「まあ、いいけど、オレらの前ではあんなふうにして欲しくはなかった。第一、見ればわかるだろうに……」

警察のやり方に不満をぶつけた宏明。

「それは言っておくよ。……二葉君、小田のことが聞きたかったのか？」

「え……？」

「小田のことを聞くもんだから、気になるのかなと思ってな」

谷崎警部はニヤリと笑った。

「好きじゃないけど、どんな奴か知りたかったただだよ」

「そうだったのか……」

谷崎警部は納得するようにうなずくと、アイスコーヒーを一気に飲み干した。

意外な人物の訪問

田中が署に連れていた翌週の金曜日の放課後、宏明は久しぶりに紀美と茂と京子を誘い、四人でご飯を食べに行くことにした。

あと二週間ほどしたらテストが始まる。テストの前には、各教科のレポートがあるので、ゆっくり四人でご飯を食べるということが出来ないため、最初に言い出したのは、宏明だった。

この前のことで、茂はなんとなく元気がなかったからで、あまり食事喉を通っていないようだった。そんな茂を気遣い、紀美と京子も呼んだ。二人きりだとどうしても田中のことを思い出してしまうためであり、四人でいると茂の気も紛れるだろうという宏明なりの配慮である。

「急にどうしたのよ？ ヒロが誘うなんて…」

京子は珍しそうに言う。

「まあ、色々あってな」

ごまかす宏明。

「色々って…？」

「うん、ちよっと…」

「ふーん…言えないことなんだ？」

これ以上、宏明からは何も聞けないとふんだのか、話題を変えた京子。

「もうすぐでテストだね。嫌だね。単位落としたらどうしよう…」

「京ちゃんなら大丈夫よ。京ちゃん、成績いいし…」

「そんなことないわよ。レポートもたくさんあるし、当分、忙しい毎日が始まっちゃう」

憂鬱な表情の京子。

「テスト前のレポートなんてヤル気だねーよな。量はハンパしいし、何もテスト前にやらせる必要ないだろ？ って感じだよな」

茂もこれから始まるレポートとテストに、京子同様、憂鬱な表情を

浮かべる。

宏明と紀美だって同じだ。

レポートとテストが終わらなければ、春休みは始まらない。

「とりあえず、単位落とさないようにしなくちゃね」

「大丈夫だろ？　なんとかなるって…」

「ヒロって相変わらずノンキよね」

「ノンキって…どういう意味で言ってるんだよ？」

「いつでもなんとかなるって言ってるんだもん」

口を尖らせている京子。

そう言われると、何も言い返す言葉がない。

「あまり深く考えててもな。人生なるようにしかならないんだから…」

宏明はやっとの思いで抵抗してみる。

「そうだけど…ヒロってちゃんと物事考えてるよね？」

「考えてるよ。さっきのようなこと言ったけど、考えるところはちゃんと考えんとな」

宏明はグラスに注がれた水を飲みながら答える。

宏明にだって、学校関係以外のことも考えなくてはいけないことはわかっている。

「深く考えないといけないこともあるし、難しいもんだよな」

茂は何かを考えている口調だ。

四人が座っているテーブルは湿っぽくなっている。

「その話はそこまでにして、楽しくしようよ！　何があったかわからないけど、せっかく宏君が誘ってくれたんだしね！」

紀美はいつにも増して、明るい表情で言う。

「そうだね。この話はこれで終わり！」

京子も紀美に習って、さっきとは違う口調で、仕切り直す。

「紀美の言うとおりで。今は今なんだし、考えるべきことはその時でもいいと思うからな」

そう言うと、宏明は真剣な表情から笑顔になった。

翌日の午前、一限目だけ授業を取っている宏明は、やっと今週も終わったという気持ちでいた。

今日は大学までバスで来ている。というのも、バイクのタイヤがパンクしてしまったのだ。

授業が終わり、いそいそと正門に行くと、見たことのある背広を着た男性が立っていた。宏明はその男性と目が合うと、ピタッと足を止めてしまった。

「二葉君だね？ 谷崎警部から聞いてるよ」

そう言いながら、相変わらず顔色の悪い小田が宏明に寄ってくる。

「あの…なんの用ですか？」

不機嫌そうな表情を小田に向ける宏明。

「谷崎警部から色々話を聞いてると、もう一度、二葉君に会いたいと思ってね。ちょっといいかな？」

「ええ、構いませんけど…」

本心は嫌だと思いつつも、承諾する宏明。

二人は大学の向かいにある古びた定食屋へと入った。注文を済ますと、二人の間に沈黙が流れる。

「なんで、オレの大学に…？」

宏明は不審な目をしながら、小田に聞いた。

「二葉君の友達の田中のことで、気にしてるのではないかと思っ
ね。どうだい？」

「オレは大丈夫です。それより、オレの友達のほうが落ち込んでい
ます」

と、名前を伏せて答えた宏明。

「そうか。聞いたとおり、打たれ強いんだね、二葉君って…」

小田は感心している。

「用ってそれだけですか？」

「それだけと言われればそうなんだが、二葉君とじっくり話してみ

たいと思っただけ」

小田が言った後に、二人が注文していたものが運ばれてきた。

小田はじっくり話してみたい、と言っているが、宏明は別に話すことなどない、と思っていた。確かに小田のことは知りたいのは事実だが、本人を目にすると、どうしても拒絶感に襲われる。最初の印象が悪かったというのもある。だが、今の宏明にとって嫌な相手ではないのである。小田のことを知るのには、人づたいでいいのに：と思っていた。

「小田さんて前は駐在やってたと谷崎警部から聞きましたけど：」
宏明は味噌汁を飲み干してから、思いきって聞いてみた。

「ああ：初めはヤル気がなかったんだが、地域の人達と触れ合ってるうちに、駐在でもいいかなと思いついてたんだ。それが、五年前に今の署に配属になったんだ」

小田は淡々と話す。

どこからどう見ても、地域の人達と触れ合うとは程遠い人物だ、と心の中で思う宏明。

「駐在ってどこの：？」

「島根県の駐在さ。僕は東京出身でね、地方に行くのはどうかと思ってたんだけど、地方に住むのはいいな、と思ったよ。地方のほうに意外に人が温かいからね」

タバコを長年吸っているのか、歯はヤニで茶色になっているのを見せながら笑った。

宏明はこれ以上質問することなく箸を進める。

再び、二人の間に沈黙が流れる。

小田と話してみても、好きになれるわけでもなく、宏明は小田の何が嫌なのかを考えていた。そこがわかれば、どういう態度を取ればいいのかがわかると思われるのだ。

それに、谷崎警部から聞いた小田が“同じ匂いがする”と言っていた言葉の意味にも疑問を感じる。一体、何が言いたいのか、どういう意味なのか。到底、宏明には理解しがたい言葉なのは事実である。

「そういえば、二葉君で彼女いるんだね」

小田はニヤリと笑って言った。

「なんでそれを…？ 谷崎警部から聞いたんですか？」

「いいや。今週に入って二、三日、二葉君のこと監視させてもらったよ」

小田のその言葉に、宏明は自分の頬がピクリと動いたのがわかった。

「監視ってなんなんだよ？！ なんでアンタに監視されねーといけないんだよ？！ 普通、そんなことしないだろ？！」

予想以上に大声になる宏明。

店内にいる全員が、二人のほうを見る。

「アンタ、頭おかしいんじゃないか？！ フザけてんじゃないよ！
！」

宏明は小田に捨てゼリフを残し、イスを蹴り飛ばして、定食屋を出て行った。

それから宏明はあるところへと向かった。それは署だ。谷崎警部に話さずにはいられない宏明は、怒りでいっぱいで気がおかしくなってしまうそうだった。

——なんなんだよ、アイツ。なんか、どっかおかしいんじゃないか？ 何考えて行動してんだろうな。

宏明の怒りはますます頂点に達すると、容易に収まるはずがなかった。

いくらなんでも、何もしていないのに監視するとは、どういうつもりなんだ、と問いたくもなってくる。

そんな思いで、署に着いた宏明は、谷崎警部を呼び出してもらい、ついさっき起こった出来事を話した。

「…そうか。それはヒドイな。僕からちゃんと言っておくよ。勿論、小田の上司にも。二葉君、嫌な思いをさせてしまっすまないな」
谷崎警部はすまなそうにしている。

「アイツ、ただの嫌味な奴じゃん。オレ、何かの事件に関与してるのかと思った」

未だ怒りでグラグラの宏明は、指をボキボキと鳴らした。

「小田はそんなことする奴ではなかったんだけどな。きつと、二葉君のことをもっと知りたい一心で監視していたんだな。でも、小田のやり方はいき過ぎだな」

谷崎警部も宏明に同感している。

「あんな奴クビにしてくれよ」

「それは言い過ぎだよ、二葉君」

「そりゃそうだけど、オレのこの怒りは収まることないな」

宏明はこれですます小田のことが嫌いになった。これから会いたくもないし、顔も見たくない。小田は自分に何をしに会いに来たのか、よくわからなかった。ただ、監視をしていた、と言いに来ただけではないか、とふと思う宏明。

「自分も悪かったと思っているよ。二葉君のこと、色々話し過ぎたところもあった」

「別に警部は悪くない。アイツが勝手にしたんだからな」

そう言くと、宏明は深いため息をつく。

——どこで見てたんだろ？ オレが紀美と付き合ってたのを知ってたから、大学近くか大学内から見てたんだろうな。オレのことを知って何がしたかったんだろうな。

小田に大学周辺から見られていたとわかると、急に気持ち悪くなってきた宏明に、谷崎警部は気にかける表情になった。

「二葉君、今日のことは本当に悪かった。何もしてない市民に監視するとはもっての他だ」

まるで記者会見をしている警官みたいだ。

「オレもいつまでも怒ってるわけじゃないから、その点は安心してくれ」

「そうか…」

ホッとした表情を宏明に向ける谷崎警部。

「さつき定食屋でも言い過ぎてしまったけど、アイツの行動のことだし…」

自分の失言のことを最初に言っておいた宏明に対して、わかっているということを示した谷崎警部。

「警部、ちよつと…」

そこに同じ部署の部下がやって来た。

「例の件、出来たか。…それじゃあ、そろそろ行くよ」

「うん。話し聞いてくれてありがとう」

谷崎警部に礼を言って見届けた後、宏明は署を出て行った。

宏明への謝罪

週明けの月曜日、この日は雨が降っていて、宏明の気持ちもどんよりしていた。これは雨のせいではなく、先週の土曜日の出来事のせいでどうも気持ちが上向きにならないのだ。

朝、家に出た時から何か良いことがないか探して気持ちを上向きにしているが、どうしても気持ちが乗る気配はなかった。それが顔に出ているせいか、一限目から茂を初め友達に、「何かあったのか？」と聞かれるハメになった。そして、ついに彼女である紀美にまで、

「元気がないよ。いつもの宏君じゃない」と言われる始末だった。

先週の土曜日のことは、小田にきちんと伝わっているのだろうか。

きちんと伝わっていると、小田はどんな処分を受けるのか。自分のせいで警官をクビにならないだろうか。それとも、署の中で揉み消されてしまうのか。宏明の中に、色んな思いが駆け巡った。

クビにならなくても、何らかの処分はあるはずだ。もしも、揉み消されたら警察を信じることは出来ないであろう。恐らく、谷崎警部でさえも…。

——警部に言った時は感情的になってたけど、もう少し冷静になれば良かったな。揉み消されるってのも心配だし…。警部とは部署が違うし、なんとも言えないな。同じ部署だとなんとかなると思うけど、こればかりはオレでさえもわからねーな。

昼休み、前に古典文学の展示会に行ったメンバーと学食で一緒に昼食を取っている時に、窓越しに映る近くのベンチでお弁当を食べている四人の男子学生を見つめながら思っていた。

宏明はビーフカレーと野菜サラダのセットを頼んだが、あまり食が進まず、先週の土曜日の出来事で物思いにふけていた。

これは学食からのものではない。一限目から物思いにふけてしまうことが、しばしばあったのだ。

「ヒロ、どうしたんだよ？ 一限から変だし…」

辻井が宏明を肘でつつく。

「あ、なんでもない…」

辻井に肘でつつかれてハツとなった宏明は、即座に否定した。

「なんでもないわけないだろ？ どう見たって今日のヒロは変だつて…」

松川はだいぶ残っている宏明の昼食を見ながら言った。

「土、日のうちに何かあった？」

当然、何も事情の知らない茂は、お茶を飲みながら首をかしげる。

「いいや、何もない…」

「隠し事してるだろ？」

茂の一言にギクリとする宏明。

そんな宏明の心を読んでか、茂は納得した表情になった。

「ふーん…隠し事か…」

茂は意味ありげな表情をする。

——茂にだけは隠し事は出来ないな。

「ヒロが隠し事なんて珍しいよな」

「それはな。それにしても、わかりやすいな」

辻井は朝から宏明の行動を思い出している。あとの二人も同感している。

「もしかして、“紀美とケンカした”なんて言うんじゃないだろうな？」

「まさか…ケンカなんてしてたら口聞いてねーよ」

宏明は苦笑しながら辻井に言った。

「そりゃそうか。朝、仲良く話してたもんな」

「じゃあ、なんなんだよ？ 気になるじゃん」

「大したことじゃないんだ」

「ま、いいけど…。ヒロ、早く食べよ。三限目が始まってしまおう」

松川が宏明を急かす。

宏明は時計を見て、慌てて残りの昼食を食べる。

あとで茂にだけは先週の土曜日の出来事を話しておこうと心の中で

思っていた。

三限目終了後、四限目を取っていない宏明と茂は学内にあるカフェと向かった。

宏明はあのことは茂にしか言えないと思い、茂をカフェに誘ったのだ。二人は席につきカフェオレを頼むと、宏明は全てを話した。

「…そうなんだ。それで、今日の様子が変だったってわけか。それにしても、あの恐面の刑事がヒロに興味持ってたとは意外だったな」茂は言いながら、田中が署に連れていかれたことを思い出した。

「でも、恐いよな。オレもあの刑事が大学近くで、ヒロのこと見たなんて知らなかったし、それにストーカーみたいじゃん」

「それは言ってる。ストーカーのように見ることはないのに…。オレのこと知りたいって言っても、自分から教えたくないな」

宏明の中に再び怒りが蘇ってくる。

「どうも好かねーよ。人は見かけで判断するなと言うけど、あの人相はな…」

「ああ…確かにな。言いたいことはわかるよ」

茂も同感しながら、小田の顔を思い出していた。

「谷崎警部はちゃんとしてくれるって言ってくれてるんだろ？ それなら大丈夫なんじゃねーの？」

茂はカフェオレのコップを持ちながら言う。

「まあな。もし、揉み消されたらと思うと、なんとも言えないんだよな」

「そうになると、警察の権力は大学生のオレらにはどうすることも出来ねーよ。どうするんだ？」

身を乗り出す茂。

「そうだな…。そしたら、警察はアテにならないってわけだ」

そう言うと、カフェオレのコップに入っているストローを持って、中身をかき混ぜる。

——揉み消されたらされたらで、何か対策を考えなきゃいけない——よな。嫌な思いしてんのは確かだし…。

茂の言ったとおり、揉み消されたら警察の権力で、ものすごい圧力を宏明にかけられると思われる。そうなると、どうしようもない。警察の権力は、宏明が想像している以上であり、恐らく個人の力では負えないのも事実だ。今は谷崎警部を信じるのみだ。

「とりあえず、ことが落ち着くまでそっとしてみるよ。もし、何かあったら谷崎警部から連絡してくれるだろうしな」

茂は微笑みながら言った。

「そうだな。今さらジタバタしても仕方ないよな」

「ヒロの不安な気持ちはわかるけどな。ただでさえ、ストーカーみたいなことされてるのに、この出来事を揉み消すとは、あり得ない」

「同性に好かれるとは思わなかったぜ」

苦笑いの宏明。

「しかも、相手は警察官だしな」

茂も苦笑いになる。

「人生ってわからないよな。茂、ありがとうな。オレ、払うな」

そう言うと、宏明は伝票を持った。

「いや、いいんだって…」

「話聞いてもらったし、気が楽になったからな」

宏明は感謝の意味を込めて言った。

それから三日後の木曜日、宏明は午前中に署に行くことになった。

一限目の授業を取っていない宏明は、午前九時に谷崎警部と会議室にいた。もうすぐで小田の部署の上司と小田がやって来るのだ。

緊張した面持ちの宏明は、時計をチラリと見た。時計はすでに九時十分を回っている。

昨日の夜に、谷崎警部から“明日の午前九時に署に来て欲しい”と電話があったのだ。どうやら理由は小田の件らしい。小田の上司か

らきちんと謝罪したい、と申し出があったようなのだ。これで宏明が抱いていた揉み消されるのではないか、という不安は解消されたので、内心ホッとした。

宏明は緊張しながら深呼吸をすると、会議室のドアがガチャッと激しい音を立てて開いた。

「いやー、遅れてすいませんな」

五十代半ばぐらいで小太りの男性が、気さくな感じで小田と一緒に入ってきた。

「朝井警部補、わざわざすいません」

谷崎警部は立ち上がり、朝井に頭を下げた。

宏明も朝井と目が会うと、座ったまま軽く頭を下げた。

朝井と小田が座ると、本題に入った。

「えーっと：今回はうちの部署の小田が、谷崎警部の知り合いの男性に、ストーカーに近い行為をしていた、ということですが、これは不愉快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした」

朝井は宏明に頭を深々と下げた。

正直、小田の上司に謝られても：と思ってしまう宏明。

謝るなら小田本人から謝って欲しいものである。

宏明が戸惑っていると、

「小田くんが二葉君を監視していたと言った時、二葉君はいつにも増して怒っていたんですよ。普段はそんなに怒らない子なんですけどね」

谷崎警部は宏明の代わりに言ってくれる。

「それはそれは：。部下達には一般市民には粗相のないように、と言っているんですがね」

朝井はハンカチで額を拭いた。

「オレは小田さんの口から謝って欲しいんです。上司ばかりに謝らせるのはいかがと思います。上司がちゃんと言い聞かせているのに、小田さんはなぜ聞けないんですか？ 子供じゃないんだから、自分の上司が言ったこともわかるでしょ？」

宏明は怒りに任せて、自分が思っていることを小田にぶつけた。だが、顔色の悪い小田は、下を向いたままで謝る気配は全くない。その態度が余計に宏明の神経を逆なでさせた。

「小田さん、アンタは人間として常識というものを持ち合わせていないんですか？ よくそんなんで警察官として務まっていますよね」さっきよりもさらにキツイ口調で、小田に言った。

「小田、ちゃんと謝ってくれないと、今以上に怒らせることになるんだ」

朝井は小田の肩に手を置き言った。

「：すいませんでした：」

小さな声で謝る小田。

「それじゃあ、聞こえないだろう」

「すいませんでした。これから二葉君に迷惑かけるようなことは二度としません」

宏明と目を合わせると、怯えながら謝った小田。

「小田君の気持ちもわからなくもないが、監視するのはいき過ぎだったと思う。これからも色々あるが、小田君も頑張ってくれ」

谷崎警部が小田に言うのと、小さくはいと返事した小田。

「とりあえず、一件落着いてことでいいかな？」

朝井は宏明に聞く。

「はい。オレもこれ以上、ことを大きくしたくはないんで…。ただ、小田さんに謝ってもらいたかったんで、それでいいです」

宏明の言葉に、うなずいた朝井は、

「谷崎警部、お手間をおかけしてしまい申し訳ないです」

「いや、とんでもない。僕はそろそろ…」

そう言うのと、谷崎警部は立ち上がる。

「オレも大学に…」

——ま、これでいいか。あまり抗議したら、警部の立場もあるし…。宏明はそんなことを思いながら、小田のほうをチラリと見て、会議室を後にした。

もうこれから二度と小田と会わなくていいんだ、と宏明の心は重荷が降りたようだった。

宏明の清々しい気持ち

翌日の宏明は、どこか清々しい気分だった。それは昨日、小田に謝ってもらったからだ。

もし、あのまま何もしてもらえなかったら：と思うと、宏明の怒りはどこへぶつけたらいいのかわからないし、揉み消されることは、一番あってはならないことである。揉み消されたとして、再び小田に会うことになるかもしれないとなると、ぞっとしてしまう。ただでさえ、監視されるという行為をされていれのだから、きちんとしてもらいたかった、というのが宏明の心境だった。

そして、昨夜、谷崎警部から宏明のケータイに電話があったのだ。谷崎警部の口からある意外なことを聞いた。

「二葉君、今日の件だが、小田君がまた駐在に戻るようになったよ」残念だというふうな口調の谷崎警部。

「いつ決まったんだよ？」

宏明はわけがわからないでいる。

「今日の夕方だ。今朝会った朝井警部補が上司に報告したら、速攻で決定したってわけだ」

「もしかして、オレのせい：？」

宏明は一抹の不安を胸に抱きながら聞いてみた。自分のせいではないかと考えてしまったのだ。

「いや、違うよ。二葉君の前にも同じようなことをされた人がいてね。今回、二度目だということで、駐在に逆戻りさせられたんだ」谷崎警部は宏明のせいではないということを書いておいた。それを聞いてホッとした宏明は、

「小田さんて自己中だろ？」

苦笑しながら聞く。

「まあ、自分勝手なところはあるといえばあるな。とりあえず、今日の異動のことを報告しておこうと思ってな」

「うん、わかった。ありがとう」

札を言った後、ケータイを切り、ベッドに寝転んだ。

小田が異動ってこともあり、清々しい気分になったのかもしれない。――まさか、前にもオレと似たようなことをしてたとは……。二度目だから駐在に逆戻りってことか。それは仕方ないことなのかかもしれない。

大学の駐輪場から校舎の中に入りながらそう思っていた宏明。

――あの朝井警部補って人はいいい人だ。自分の部下が市民に事件でもないのに、二度も監視してたなんてことを知ったら、普通は隠そうとするもんだぜ。

朝井警部補の迅速な対応が嬉しかった、というのが、宏明の本音だった。きつと、朝井警部補にとって、小田は自分の部下としては適してはいなかった、ということなんだろう。

「ヒロ、おはよう！」

背後から茂がかけ寄ってきた。

「あ、茂、おはよう」

宏明は振り向き、茂に挨拶する。

「何かあった？　ここ数日より顔つきが違う」

茂はいつもと違う宏明を見て指摘する。

「いや、別に……」

ニヤけながら答える宏明。

「なんでごまかすんだよ？　あ、もしかして、あの恐面の刑事のこと？」

「茂ってスルドイな。ま、茂はオレの事情知ってるからいっか」

そう言いながら、宏明は観念したように谷崎警部との電話のことを話した。

「へえ……異動か……。あの恐面の刑事ってヒロの前にも同じようなことをしてたんだな。興味を持った人には近付きたいってのがあるんだと思うけど、いくらなんでもやりすぎだな」

一限目の教室について、イスにカバンを置きながら言った茂。「こ

れでいいだろうな。小田さんとも会わなくて済むと思えばな。もうこんな思いするのはごめんだ」

「そりゃあな。短期間で色んなことがあったけど、テストが終わるまでテストに専念出来るってわけだな」

茂が言った後に、教授が教室に入ってきた。

テスト前のレポートが終わり、宏明の大学はテスト週間に入った。テスト週間が終われば、約二ヶ月間の春休みなのだが、待ち遠しいくらいだ。

テスト三日目の午後七時、食堂で早めの夕食を終えてから、翌日のテスト勉強をしていた宏明は、シャーペンを置き伸びをしていた。家でテスト勉強してもはかどらないため、八時近くまでやろうと思っていたのだ。

——今週いっぱいテストも終わるし、春休みが始まれば、紀美をどこか遊びに連れて行こうかな。

ご飯を食べに行くというのはあるのだが、最近、あまり紀美と遊びに行っていないかったのだ。

——オレがどこも連れていかなーから、紀美は不満に思ってるかな。

教科書を見つめながら思う宏明。

「宏君……？」

紀美が宏明の座っているテーブルに近付いてきた。

「あ、紀美……何してるんだよ？」

紀美が目の前にいるのには驚いた表情をする宏明。

「図書館で勉強してたんだけど、食堂に行って勉強しようって思ってたね。宏君ったら、そんなに驚かなくてもいいのに……」

頬をふくらませながら、宏明の向かいのイスに座る。

「何時まで勉強する気なんだよ？ オレはあと一時間くらいで帰る

つもりだけど…」

頭をかきながら紀美に聞く宏明。

「私も宏君と一緒に帰る」

「わかった。少しだけど一緒に勉強しよう」

「うん。そういえば、最近、相川君と一緒にいるよね？」

突然、意味深な質問をしてくる紀美。

「一緒にいるって…前から茂とは仲良いからいるけど…」

紀美の質問の意図がわからず、なんて答えていいのかわかないでいる宏明に、紀美はクスツと笑った。

「そりゃあね。今週に入ってからアダルトな話をしてる気がするんだけど、気のせいだったりする？」

事情を知らない紀美は首をかしげる。

紀美の言いたいことは、恐らく小田のことだろう、と直感した宏明は、

「ちょっと色々あってな」

「そっか。色んなことがあるんだね」

「まあな。さっ、勉強に取りかかろう」

紀美はうなずくと、プリントを広げた。

そんな紀美を愛しく見つめていた宏明がいた。

午後八時、食堂から出た二人は、途中まで帰ることにした。宏明はバイクを押しながら、駅まで歩く。今日の空は、星が輝いていて綺麗な日だ。二人は無言のまま、三分の一の道のりを歩く。

「宏君、迷惑だった？」

紀美は宏明の顔を見つめながら聞く。

「迷惑って…何が？」

「食堂で一緒に勉強したこと」

「いいや。急にどうしたんだよ？」

「私が食堂で宏君に声かけた時、驚いてたから迷惑だったかなって思ってた…」

紀美の声が少し泣きそうだったのを聞き逃さなかった宏明は、気になりながら、

「全然、迷惑でもなんでもない。いつも、テスト期間中この時間まで紀美がテスト勉強してるなんて思ってたからな。でも、紀美がそう思ったんだっら悪かった」

バイクを止めて、紀美の顔をしっかりと見つめながら言った。

一方、紀美のほうはうつむいたまま、宏明を見ようとしなない。

「決して、嫌だとかそういうのではない」

宏明の一言に、紀美は顔を上げた。

「ごめんね。宏君が驚いてたから、勉強の邪魔しちゃったかな、悪いことしたかなって思ってたの」

涙目の紀美は、くしゃくしゃの笑顔になる。

「オレの態度も悪かったなと思ってる」

「ううん、いいの。宏君、テスト頑張ろう。私、ここまででいい。

送ってくれてありがとう！」

一気に言った後に、紀美は駅の方へ走って行った。

宏明は呆氣にとられながら、紀美の後ろ姿を見ていた。

——アイツ、最近、自分の気持ちを伝えてくれるようになったよな。前まではそんなことなかったのにな。オレはそれが嬉しいけど…。宏明は紀美を見届けると、ヘルメットをかぶり、バイクにまたがった。

新しく始まった三人の生活

テストが終わり、待ちに待った春休みがやってきた。春休みに入ると、二人の兄と一緒に住むマンションを探すことになる。しかし、二人の兄はサービス業で、土日祝は無理なため、平日で三人の休みが合う時ではないと、マンションの物件探しに行くのは困難である。二月中旬のある木曜日、三人は休みを合わせて、不動産屋にやってきた。三人の条件に合ったマンションの物件をいくつか見せてもらった。その中の一つのマンションが、宏明の気に入ったのがあったのだが、二人の兄に却下かれてしまったのだ。

「このマンションなんていいんじゃないかねーか？」

すぐ上の兄の和明が言った。

「家賃七万八千円か……。まあ、悪くないかもな。部屋数少ないけどなんとかなるかな」

一番上の兄の友明も和明の意見に賛成のようだ。

「宏明はどうだ？」

友明はマンションの物件の紙を渡す。

「これでいいんじゃない？」

「なんだよ？ さっきのマンションのことで勘ねてるのかよ？」

「別に……。さっきのマンションと似たようなマンションだしな」

宏明は自分が気に入った物件を思い出しながら言った。

「じゃあ、決まりだな。一応、この物件がどんなところか見に行きたいんですけど、いいですか？」

友明は対応してくれている男性定員に願い出る。

「いいですよ。ここから少し遠いんで、車で行きましょうか」男性定員は物件の紙を持ち立ち上がる。

それにならい、三人も立ち上がる店へと出た。

車で約十五分、希望のマンションに着き、中へと入る四人。

「おー、ベランダからの眺め、最高じゃん！！」

和明はベランダに出ると、感動の声を上げる。

「兄貴、ここにしようぜ！」

「そうだな。部屋もいいし文句はないな」

友明は部屋を見渡しながら頷く。

「オレもここでいい。入り口から入ってすぐの部屋は、オレの部屋な」

宏明はもう住むつもりで希望を言う。

「何言ってるんだよ？　なんで宏明が勝手に決めてんだよ？」

宏明が言うと、即座に反論する和明。

「まあまあ：そこでケンカしても仕方ないだろ？　どうする？　ここにするか？」

友明は二人をなだめつつ、住むかどうか聞く。

「うん。その前に親父達に報告してからな」

「とりあえず、保留ってことでいいですか？」

和明の答えを聞いてから、友明は男性定員のほうを向いた。

「大丈夫ですよ」

男性定員はニツコリ笑ってくれる。

その後、宏明達が行ったマンションの同室の他の部屋を見てから、マンションを後にした三人は、家路に着いた。

それから十日後、二葉三兄弟は宏明の大学近くのマンションへと引っ越ししてきた。

不動産屋に行った日、三人は両親に住みたいマンションのことを話した。

三人で住みたいということは、前々から話していて、父は賛成していたが、母だけは反対していた。反対の理由は、宏明がまだ学生だからである。いくらバイトしているからといっても、生活費を出すのはなかなか大変であるため、暮らすなら兄二人でしろ、と言われ

てしまったが、そこで食い下がる宏明ではない。

一度は実家を出てみたかった宏明は、「確かに自分はまだ学生で生活するのは無理だけど、若いうちに出来ることはやっていきたい」と、言葉を選びながら母に言った。宏明の言葉に、母は渋々OKの返事を出したが、まだ学生なのに…という心境が表情になっていた。確かに母の言ったことも一理あるし、母の気持ちも全くわからないわけでもない。だが、いまやらなきゃ後悔してしまう、という思いが、実家を出てみたいという気持ちを拍車を掛けた。恐らく、自分が学生ではなかったら、即賛成になっていたかもしれない。

——実家を出てみたいⅡ親と一緒に住みたくないつてことなんかもな。自分でも知らず知らずのうちにそう思っていたのかもしれない。引っ越し前日、準備を終えて荷物の多い床に寝転がり思っていた宏明。

しかし、実家を出てみたい、という一つの夢が叶いそうなので、ここで引き下がるわけにはいかない宏明は、兄弟三人で住めるんだという今までに感じたこともない、新しい気持ちになっていた。

「宏明、キッチンはおれらが片付けとくから、自分の部屋、片付けてこいよ」キッチンに置いてあった物を片付けていた宏明に、リビングで和明と片付けている友明が声をかけた。

「ああ、わかった。じゃあ、自分の部屋を片付けてくる」

目一杯伸びをした後に、二人の兄に言うと、玄関近くにある部屋へと向かった。

全く片付いていないため、宏明の部屋は足の踏み場がないくらいのも物がたくさん置いてある。これらの状況を見て、宏明はどこから手をつけようか迷っていた。しばらく考えた後、机回りから片付けをやり始めた。

宏明にとって、引っ越しは今まで生きてきた人生の中で初めての体験で、新鮮な気持ちがある反面、片付けなどで大変だとは思ってもみなかった。

しかし、大変なことばかりではない。新しい家になると、気持ちが

いつもより違うし、何より普段の日常生活が違って見える。

だが、こんな感じなのは、最初のうちだけだろう。生活に慣れてしまうと、新鮮な気持ちは失われてしまうであろうと思われる。

部屋の片付けをやり始めてから一時間近くが経った。宏明はケータイを取り出し、写メで部屋を撮り、紀美と茂と京子の三人に、新住所と写メを送信した。一番最初に京子から返信がきた。最初に紀美からの返信が欲しかった宏明は、少しガッカリしたが、もしかしたらバイト中で返信が出来ないのかもしれない、と思い直したのだ。

「部屋の片付け進んでるか？」

和明がオレンジジュースをてにしながら、部屋に入ってきた。

「うん、なんとか…」

ケータイを閉じ、和明のほうを見て言った。

「だいぶ片付いたな」

そう言いながら、オレンジジュースの入ったコップを宏明に手渡した和明。

「ありがとう。今日から全てオレらでやらないといけないんだな」

「うん。これでいいんじゃない？ 三人で決めたことだし…」

宏明のベッドに座ると、ため息をついた和明。

「今までお袋にやってもらってた分、大変そうだ。それに、あの家、広いから二人でのびのび出来るな」

「確かに。そういえば、友兄さんは？」

「ついさっき、夕食買いに行った」

「ふーん：気が付かなかった」

「片付けで気が付かなかったんだろう。でも、三人で住むって変な感じだよな」

「まあな。途中で嫌だと思ってっても後戻りは出来ないしな。オレらがこれでいいやって思ったらいいんだろうけど…」

宏明はゆっくりとした口調で言う。

これには和明も納得しているようだ。

「片付けも一段落してるみたいだす、リビングに来いよ」

和明はベッドから立ち上がると、宏明の部屋を出る。
宏明もオレンジジュースを一気に飲み干すと、部屋を出た。

二度目の告白

宏明達がマンションに引っ越ししてきて、五日が経った。宏明は自分の部屋を片付けていた。

この日は紀美や京子、辻井達五人が、引っ越し先のマンションに遊びに来るのだ。五人は泊まりたいと言いつ出したのだが、生憎布団が四組しかないため、宏明は困り果てていた。

——うーん：これは誰か一人に犠牲になってもらうしかないな。オレのベッドで寝たいなんて奴はいねーと思うし……。それに、寝る部屋はどうしようか？ オレの部屋は一人しか寝られねーしな。ああ……どうしよう……。

頭を悩ませる問題ばかりだ。

全員がやって来るのは、午後五時半だ。今日は鍋パーティーをやるうということ、食材は紀美と京子の女二人組が持ってくることになっている。

二人の兄は帰りが遅いため、近所迷惑にならない程度にドンチャン騒ぎしても大丈夫なのだ。

この日、バイトのない宏明は、昼過ぎに実家へ鍋を借りに行くと、珍しく母が家にいた。いつも昼間はパート勤めに出ているのだが、この日は体調が悪いので休んだ、と母が言っていた。宏明はまだ昼食を取っていない母のために簡単に食事を作ると、鍋を持ってマンションへと戻った。

そして、マンションに戻った時、母からありがとう一言メールが入っていた。宏明も鍋のことをメールで礼を返信すると、自分も少しは役に立てたのかな、と改めて思いながら、マンションへと入っていった。

そうこうしているうちに、あつという間に午後五時半になった。松川の車でやって来た五人は、珍しそうに宏明達が住むマンションを見ていた。

「意外と綺麗なんだな。ま、当たり前か……」

リビングを見渡しながら、辻井が言った。

「私もそう思った。あまり期待してなかった」

京子も苦笑いしながら言う。

「築十二年のマンションらしい。まだまだ新しいマンションだよ。

さっ、準備しようか？」

宏明は立ち上がり、キッチンに向かう。

紀美と京子も立ち上がる。

「私達も手伝うね」

紀美は宏明の隣に立ち、見上げて言うと、宏明は微笑みながら頷く。

「もう、二人共、ラブラブなんだからやーねえ。人前で熱々になるなんて……」

京子は妬きながら言う。

「ホント、この二人はどこでもラブラブだよな」

松川はニヤけている。

「別にどこでもラブラブってわけでは……」

スーパ―の袋から食材を取り出しながら、宏明は自分の心臓の高鳴りを隠す。

「早くやっちゃおう。その二人は鍋にスープの素を入れといてよ」
京子はテキパキと仕切ると、松川と辻井に鍋用のスープの素を渡した。

それから、京子の指示のお陰で、鍋の準備が出来た。

「それにしても、ノンちゃんてばヒロがいれば、いつもくっついてるよね」

「くっついてるって……付き合ってるんだから当たり前だと思うけど……」

紀美の代わりに、辻井がフォローする。

「そりゃあ、そうだけど…。ノンちゃん、ヒロの彼女ってだけで羨ましがられるでしょ？」

京子は意味ありげに聞いてくる。

——今日の京子はやけにオレらにつっかかるな。

宏明は鍋の具合を見ながら、ぼんやりと思う。

「付き合い始めた頃はね。今なんて全くそういうのは言われないよ。今日の京ちゃん、変だよ？ どうしたの？」

いつもと違う京子に首をかしげる紀美。

「そうかな？ 私はいつもこんな感じだと思うけど…」

「どう見てもいつもの京子じゃねーよ」

松川も京子の態度に違和感を感じていた。

これは紀美と松川だけが感じていたのではない。宏明と茂と辻井も感じていた。何かあったのか、とにかく文句をつけたいねかもしれない。誰だってそういう時もあるが、直接文句をつけるというのはどうかと思う。

「別に何かあったわけじゃないのよ。ヒロ、そろそろ鍋いいんじゃない？」

京子は宏明の横にすり寄ってくる。

何かを企んでいるようだ。

「そうだな。さっ、食おうか！」

すり寄ってくる京子にやや引き気味の宏明は、鍋の蓋を開けた。

それと同時に、六人は楽しく食べ始めた。

午後十一時半、片付けも終わりホッコリとしていた。酒が入ったせいか、茂と辻井と松川の三人は、リビングで寝てしまっていて、一向に起きる気配がない。そんな三人を見て、宏明は三人分の掛け布団を持ってくると、三人に掛けた。紀美と京子は、一緒にTVを視ている。宏明はマグカップに紅茶を注ぐと、女二人に渡した。

「ヒロ、私の寝る場所どこでもいいから。ヒロはノンちゃんと部屋

で一緒に寝るんでしょ？」

京子は体育座りをして、マグカップを両手に持ち、宏明に言った。

「うん、まあ…。寝るったってどこで寝るんだよ？」

「私、リビングでもいいよ」

「茂達が寝てるけど…」

「いいの。はじっこのほうで寝るから…。私ね、寝れたらどこでもいいの」

「そっか、わかった。スマンな、部屋数少なくて…」

「ううん、いいよ。気にしてないから…」

そう言っていると、京子は紅茶を啜る。

「私、紅茶飲んだらシャワー浴びてくるね」

紀美は笑顔で宏明に言う。

「オウ！ わかった！」

そんな二人の姿を愛しそうに見つめる京子。

「もう二年半だね」

京子は二人を交互に見て言った。

「うん、そうだよ。早いね、付き合ってもう二年半だなんて…」

紀美は付き合ってから時間の時間を噛み締めるように言った。

「そうだな。紀美って付き合い始めた時、オレと目も会わせてくれなかったんだぜ」

宏明は冗談っぽく言う。

「あれ？ そうだったっけ？」

付き合い始めの自分の行動を完成に忘れてしまっている紀美。

「そんなこと言ってたねー」

「えっ?! 京ちゃん知ってんの?!」

思わず、大声になってしまう紀美。

「知ってたよ。ずっと“紀美が目合わせてくれない”って言った。ヒロの話聞かされてたんだから…」

京子は当時のことを思い出しながら答える。

「そんなことしてたんだ。私、そんなつもりなかったんだけど…」

「わかってるって。慣れてなかったんだろ？」

「うん、まあ……」

「ヒロの話を聞いてて、すぐに別れるんじゃないかなーって思ってた。でも、見事に私の予想も外れちゃったよね」

少し淋しそうに言う京子。

「そんなこと思ってたんだな」

「だって、ヒロの話聞いてたらそう思っちゃったんだもん」

「そうか……。オレの話、そんなに切羽詰まってた感があったんだな」

宏明は頭をかき言った。

「宏君、シャワー浴びてきていい？」

「ああ……風呂場、リビング出てすぐだしな。マグカップ、預かっておくよ」

「うん、ありがとう」

マグカップを宏明に渡し、着替えを持って風呂場へと向かった紀美を、二人は見届けた。

紀美が風呂場に行ってから、宏明と京子はベランダに出た。最初に言い出したのは、京子からだ。二月の風は、ひんやり冷たい。二人は何の会話もなく、ただ時間が過ぎていく。

「ねえ、ヒロ……」

京子はゆっくり口を開いた。

「なんだ？」

宏明は前を向いたまま反応する。

「私ね、まだヒロのこと好きなの」

静かに落ち着いた口調で、今の気持ちを告げた京子。

宏明は京子のほうを見る。

「さっき、すぐに別れるんじゃないかなって思ってたって言ったよ

ね？ それはノンちゃんと付き合い初めてた時から、ずっと今まで思ってた。ノンちゃんと付き合うってわかった時、私とても悔しかった。どうして私じゃないの？ どうしてヒロと付き合えないの？ って思った。ヒロにフラれた時だって、なんで？ って気持ちばかりだった。私のほうがノンちゃんよりも仲良いのに…って思ってた。付き合ってる二人を見るのが辛かった。でも、私はノンちゃんとは離れようとは思わなかった。だって、ノンちゃんは私にとって心から色んなことを話せる一番の親友だもん」

京子は今までの辛い思いや紀美のことを、全て宏明に打ち明けた。そんな京子の気持ちを痛いほどわかった宏明は、京子にどんな言葉をかけようか悩んでいた。それに、京子の気持ちにはなんとなく気付いていたのだが、宏明は京子の気持ちに気付かないフリをしていたのも事実であり、申し訳なく思っていた。

「ホントにごめん。京子に辛い思いさせてしまってた…。でも、今のオレは紀美を大切にしたいと思ってる。だから…」

「いいの。もう一度、きちんと自分の気持ちを整理したかったの。いつまでも、グチグチとヒロのことを思っても仕方ないって思ってたから…」

元氣印の京子が涙目になっているのに気付いた宏明の胸は痛んだ。

「ヒロ、ちゃんとノンちゃんのこと、大切にしなきゃ許さないんだから…。私をフツテまで付き合ってるんだしね」

京子は涙目を隠すように、わざと明るく言った。

「大丈夫だ。ちゃんと紀美のことを大切にするから…。あっ！ 辛い思いさせてしまったからお詫びにデカプリンあげる！」

宏明は笑いながら言った。

「何よー？ 私のことバカにしてるでしょー？」

「してねーよ。寒いから早く中入ろうぜ」

宏明は寒そうにしながら部屋に入る。

——京子の気持ち、凄く嬉しかった。この想いをムダにはしないようにしていきたい…。
そう心に誓った宏明であった。

女の友情

翌日の午前十一時前、少し遅めに起床した宏明達。当然、二人の兄は仕事に行ったためいない。宏明は全員分のオレンジジュースを入れると、全員は無言のまま飲んでいる。

「今日はどうする？」

松川は眠そうにしながら、宏明に聞いてくる。

「うーん…どうしようか？ 特にやることないだろ？」

「まあ、やることないと言えはないけど…」

辻井も今日一日の予定に困る。

「これから買い物に行くなんてどう？」

紀美は提案する。

「おっ！ いいねえ。ノンちゃんいいこと言うねえ…」

「松川君、それ、どういう意味？」

紀美はわけがわからない様子だ。

「いや、深い意味はないんだって。どうするよ？」

「賛成！」

「よし、決まりだな」

茂の一言に、全員はいそいそと用意をし始めた。

宏明達一同は二台の車に分かれて、若者達が買い物する街へとやって来た。車は近くの駐車場に置くと、先に軽く昼食を済ませ、男四人組と女二人組に分かれて、買い物することになった。

実はというと、京子は昨夜の出来事から紀美とロクに口を聞いていない。京子の中でまだ気持ちの整理がついていないのだ。二度の告白をして、そして二度もフラれた。

だけど、昨夜の告白だけは違った。勢いだけで告白した感があるが、京子は京子なりにきちんと自分の気持ちを考えて、真正面から宏明にぶつけた。宏明も京子のその気持ちを受け止めて、返事をくれた。京子にとっては聞きたくなかった返事だが、宏明を諦める材料にはなった。

宏明が紀美と付き合っている時点で諦めなければいけないのだが、そんな簡単に諦められるはずもないのは当然のことで、それで昨夜、自分の気持ちにケリをつけるつもりで宏明に告白した。

紀美とロクに口を聞いていないため、紀美に八つ当たりしてるつもりはないが、紀美が事情を知れば、“八つ当たりをしている”と言われても仕方ないな、と思う京子。

そして、紀美と京子は靴屋さんに入り、お互い別々に店内を見て回る。

「そのパンプスいいんじゃない？ ノンちゃんに似合ってると思うな」

紀美がパンプスを試しに履いている背後から、京子が声をかけてきた。

「そう？ でも、ちょっとハデすぎないかな？」

パンプスの色を見ながら、京子に意見を求める。

「そうねえ：ノンちゃんからすると少しハデかも：。でも、可愛いし、何しろヒロが“紀美、可愛いよ”なあって言っちゃったりしてー？」

何を考えているのか、京子はおどけて言ってみせる。

「まさかあ：。宏君はそんなこと言うキャラじゃないもん」

「そうよねえ：。ヒロのことだし、心の中で可愛いって思うタイプだもんね」

「どうしようかな？ このパンプス買おうかな？」

紀美はパンプスに目をやり、買うかどうか悩む。

「買っちゃえば？」

「うん、じゃあ、買おうかな。レジ行ってくるね」

紀美が言うと、京子は微笑みながらうなずいた。

ひとしきり、買い物が終わると、二人は駅近くにあるファーストフード店に入り、ジュースだけ頼んで休憩することにした。二回の隅に座り、座りジュースを飲むとホッと一息ついた。

「いっぱい買い物しちゃったねー」

京子はお互いが買ったショッピング袋を見ながら言った。

「そうだね。こんなに買い物したの久々だよ。次のバイト代が入るまで、買い物は控えなきゃ、だよ」

「私もだよ。待ち合わせ時間まで一時間近くあるけどどうする？」

「あとでプリクラ撮ろうよ。最近、京ちゃんとプリクラ撮ってなかったしさ」

「OK！」

快く承諾してすると、ジュースを飲む。

「でも、京ちゃんが喋ってくれて良かった」

紀美は少しホッとしたような口調だ。

「昨日、私がシャワー浴びた後から、宏君と京ちゃんの様子が変わったし、京ちゃんはあまり喋ってくれないし…何かあったのかなって思ってた」

何も知らない紀美は、自分の不安な想いを言った。

「何かあったなんて思っていないって言ったらウソになるよ。元々仲良かったし、宏君と付き合う前の二人のことは聞かないつもりでいるし、聞くつもりもないよ。でも、昨日の夜の二人の様子を見てたら、なんだか不安になっちゃって…」

紀美はジュースの入った紙コップを強く握りしめる。

そんな紀美を見て、本当のことを言ってしまうおうと思った京子だが、言わないでおこうと思った。言ってしまうえば、余計に紀美を不安に

させてしまうだけであるのは確かだ。

「何もないよ。ノンちゃんを不安にさせてしまってるのはわかった。でも、私はヒロとは何もないのよ。信じていうほうが無理かもしれないけど…」

「何もない…」

今にも泣き出してしまいそうな紀美は、京子を見る。

「もう、ノンちゃん、そんな顔しちゃダメよ。ヒロはノンちゃんを大切にしているんだから…ねっ？　笑ってるノンちゃんがヒロは好きなんだしね。ホントだよ」

ニコニコ笑顔の京子。

これは、紀美を安心させるものである。

「京ちゃん…」

「ホラ、笑ってよ」

「うん…ごめんね、京ちゃん、疑ったりして…」

ぎこちない笑顔で、京子に謝る紀美。

「いいのよ。私だってノンちゃんがこんな不安になってるだなんて思ってたから、悪いことしたなって思ってたんだから…」

京子は昨夜から紀美と口を聞かなかったことを反省した。

「ホント、ヒロってノンちゃんを不安にさせる名人よね」

「うん、そうかもね」

——不安になっているのは私なんだ。宏君は別に私を不安にさせる名人でもなんでもない。私が勝手に…。

ゆったりとしながら京子の質問に答えつつ、そう思う紀美。

いつだって不安になるのは自負からである。宏明も不安になっているだろうけど、宏明はあまり言ってくれない時が多々ある。だから不安になる。本当に自分は宏明の彼女として相応しいのか、と何度も思ったこともあったが、宏明は自分が好きで付き合っているんだと思い直したのだ。

「ノンちゃん…？」

何か考え事をしている紀美に声をかける京子。

「何かあったら言ってね。私に協力出来ることがあったら、協力するから：」

「ありがとう、京ちゃん：」

紀美はうなずきながら礼を言う。

「さっ、プリクラ撮りに行こうよっ！！」

京子は紀美を元気づけるように言った。

紀美のイメチェン

ある雨の夕方、宏明はバイト先からマンションへと帰宅していた。今日は午前中から夕方までフルでバイトに入っていたのだ。この日は朝から降っていた雨は、宏明がバイトを終えて帰る頃には、さらにきつく降っていた。

——この分じゃ、明日も雨かな。ここのところ、晴れてばかりいたからたまに雨ってのも悪くないか…。

今日はバスでバイト先に行った宏明は、久しぶりの雨で気が晴れていた。いつもなら雨だというだけで、気分がどんよりするが今日だけは別だ。

それは、この前の京子の告白が、数日の宏明の気持ちをより一層暗くさせていた。

京子の涙目をしている表情が、宏明の脳裏に今でもこびりついている。忘れようと思っても忘れられない、忘れるというほうが無理なわけで、当分、京子からの告白は宏明の中から消えることはないだろう。

そして、今日の雨は宏明の中にあるどんよとした気持ちを洗い流してくれるような気がしていた。

——みんなで買い物に行ったきりだから、どうしてるだろうな。全く会えね——ってわけじゃないけど、別に会おうと思えば会えるけどな。でも、そうすると紀美に不安な想いをさせるだけだな。

バスを降りて、マンションまでの距離を、宏明はいつもよりゆっくりと歩きながら思っていた。

——京子は彼女じゃないから、そこまで気にかける必要もないか…。それより、紀美は知ってんのかな？ 京子から聞いてるかもしれないね——よな。

別に紀美に知られてはマズイことではないのだが、友達の京子が彼氏の宏明に告白したなんてことになる、紀美がどう思うか、宏明

にとって気になるところだ。自分が紀美と同じ立場だったら……と思う。

——複雑なことになってるけど、多分、京子のことだから紀美には言っていないだろうな……。

マンションに到着した宏明はそう思っていた。

「ただいまーっ」

宏明は自分が帰ってきたことを、家にいるすぐ上の兄・和明に言った。

家に入ろうとすると、見慣れない女性物のパンプスが、宏明の目に入った。

「お帰り。宏明、お前の彼女来てるぜ」

リビングから和明が顔を出して言った。

急いでリビングに行く、いつもと違う紀美がいた。

「紀美……どうしたんだよ……？」

宏明は目を丸くしながら聞く。

「うん……ちょっとね……」

なんだか紀美の様子が変だ。

「とりあえず、オレの部屋に来いよ」

宏明は紀美に自分の部屋に来るように促した。

二人は部屋に入ると、向かい合わせに座った。

「紀美、アポなしでオレのマンションに来てどうしたんだよ？ 何か合ったのか？」

心配になり、宏明は必死になり紀美に聞いたです。

「ちよつとイメチェンして、それで……」

紀美は恥ずかしそうに答える。

「ちよつとどころじゃねーよ。かなりのイメチェンだけ……」

宏明は紀美を上から下へと見ながら言った。

今日の紀美は、グレーのワンピースにカラータイツといういでたちで、

髪は少し巻いている。いつもの紀美ならそんな格好をしないので、ドキリとしてしまう宏明。

「どういう心境？」

「いつもと違う私を見てもらえれば、宏君に少しでも女として見てもらえるかなーって…。やっぱり似合わないよね…？」

不安そうな目で宏明を見る紀美。

「いいや、似合ってるよ。それに、紀美のこと女として見てるって…。そんなに不安になることはないんじゃない？」

宏明は紀美の頭をポンポンと軽く叩きながら答えた。

「京ちゃんがね、“いつも同じ格好だとヒロに飽きられちゃうよ”って言われたから、思い切ってイメチェンしてみたけど、宏君に引かれちゃったらどうしようって思ってたんだ」

「京子のヤツ、紀美にいらんことばっか言って…」

宏明は呆れた表情になる。

「紀美も紀美だ。イチイチ、京子の言ったこと気にすんなよ」

「だって、京ちゃんが言ったこと、ホントそうだなーって思ったんだもん」

「まあ、そうだけだな」

軽くため息をついてから言った宏明。

「この分だとオレに告白したこと紀美に言ってみたいだな。イメチェンしてみろっていう京子らしいアドバイスは、紀美からするとオレに飽きられてしまうっていう不安材料だったみたいだな。でも、オレは今日の紀美の服装好きだな。」

思わず、可愛いなと思うってしまう宏明。

京子のアドバイスで、自分のためにイメチェンをしてくれるなんて、とても嬉しいことである。自分の彼女がイメチェンして可愛くないって思う人は、どこにもいない。紀美がイメチェンしようと思っただけで、宏明にとって嬉しい限りのことである。

「紀美、今日は雨降ってるし身体冷えてるだろ？ 何か温かい飲み物いる？」

宏明は立ち上がりながら聞く。

「何があるのかな？」

「コーヒーかココアかミルクのどれかだけど、どれがいい？」

「うーん…ココアでいいよ」

「OK！　じゃあ、今から作ってくるから待ってて」

約五分すると、宏明は二人分のホットココアを作って部屋に戻ってきた。マグカップを紀美に渡すと、紀美の隣に座った。

「紀美、まさかとは思うけど、今まで着てた服全部捨てて、新しい服買ったなんてことしたんじゃない？」

ココアを作りながら、ふと思ったことを聞いてみる宏明。

「まさか…そんなことしてないって…。今、着てる服だけよ。この前、みんなで買い物に行った時に、京ちゃんにコーディネートしてもらったの。普段から京ちゃんはオシャレさんだからね」

さっきの不安な目から、笑顔で答える紀美。

「アイツ、コーディネーターにでもなったらしいのにな。きっと、モデルに人気出るかもな」

「それは言えてるかも…。京ちゃんて人の面倒見るの好きだから、保育士さんとかでも合いそうだと思うな」

「ああ…。京子のいいところありすぎだな」

ゆったりとしながらの宏明をジーツと見つめる紀美。

「ん？　どうした？」

「私ね、宏君と京ちゃんに何かあったんじゃないかってずっと思ってた」

「何かあったって…？」

「京ちゃんにも言ったんだけど、鍋パーティーした日、みんな宏君のマンションに泊まったじゃない？　あの日、私がシャワー浴びてから二人の様子が変だったから、私にやましいことでもしたのかと思った」

未だに気にしている紀美は、宏明にも何か言って欲しかったのだ。

「京子はなんて言った？」

「何もないって言うてくれたよ。私、京ちゃんの言葉、信じるつもりよ。だって、信じなきゃ、友達として失格だもん」

今までにない紀美の言葉に、宏明の胸にズシリと突き刺さった。あの夜、京子が言った紀美と離れるつもりはない、自分にとって紀美は一番の親友だというものに近いものがあったからだ。

宏明は今までの女の友情は、ネチネチしていて、女の火花がバチバチで、仲がいいのは上辺だけだと思っていた。だが、今回、紀美と京子を見ていると、そんなことはないんだ、と気付かされた。宏明は女の友情をそんなふうに思っていたなんて、逆に恥ずかしくなってしまうくらいであった。

「京子の言うとおりで。紀美が考えてるようなことはない」

「ありがとう。京ちゃんが何もなかったって言うてくれるまで、私に言えないことが二人の間にあったのかなって思ってた。だから、氣になって仕方なかった。でも、二人の答え聞けて良かった」

肩の荷が降りたのか、紀美はいつになくリラックスした表情で言った。

宏明もあの夜のことは語る気もないし、紀美の気持ちも京子の気持ちも大切にすると決めたのだ。

少々、隠し事をしてみたいに思えるが、あの夜のことを紀美に話したところで、紀美を大切にしたいという紀美の気持ちは変わることはない。むしろ、あの夜のこと、自分の気持ちを強く再確認していた。

「私、宏君の彼女で良かったな」

「そんなこと言われるなんて光栄だな」

宏明は照れを隠すように、ホットココアを飲む。

「ココア飲んだら帰るね。急に押しかけちゃって長居しちゃったし……」

紀美が時計を見ると、午後七時になろうとしている。

「晩飯、食っていけよ」

「今日は遠慮しとく。今日、早く帰るって言ってしまったからね」

「そうか。今日は久々に紀美と二人で会えて嬉しかった。明日からも頑張れそうや」

ベッドにもたれかかり、神妙な面持ちで紀美を見つめた。

見つめる先にあるのは…

そうこうしているうちに、あつという間に三月下旬になり、もうすぐで宏明の大学では新学期を迎えようとしている。

突然の紀美のイメチェンから、紀美とはメールするだけでデートはしていない。何度か宏明から「デートしたい」とメールをいれたが、紀美の返事は「今日は無理だ」という返信がくるのだ。何か企んでいるのか、と思うこの頃だが、きつと紀美は紀美なりに忙しいのだと解釈したのだった。

そして、三月の最終の水曜日、鍋パーティーをしたメンバーで花見に行こうということになった。宏明は久々に紀美に会える嬉しさから、いつも以上にオシャレに余念がないのであった。

午後二時、宏明が待ち合わせ場所についたら茂と辻井と松川がもう来ていた。

「お前ら、早いんだな」

「オレらも今来たところだよ」

松川が答える。

「ヒロ、オシャレなんてしてきてどうしたんだよ？」

茂は宏明を肘でつつきながら、ニヤけて聞いてきた。

「いや、別に…」

「どうせ、紀美と久々に会う、とかだろ？」

辻井は宏明の身なりを見て言う。

「あ、バレた？」

「わかりやすいヤツ…」

茂は苦笑いをしている。

「それにしても、京子とノンちゃん遅いな」

辻井はケータイの時間を見ながら呟く。

「そうだな。もうすぐで来るんじゃないか？」

松川がそう言った瞬間、

「遅くなってゴメン!!」

向かいの横断歩道から京子が手を降って、小走りでやってくる。後ろには紀美もいる。

「やっと来たな。…ん？ ノンちゃん雰囲気変わった？」

茂は紀美を見て言う。

辻井と松川も同じことを思ったようだ。

「うん。イメチェンしてみた」

少し恥ずかしそうにする紀美。

「今日は十一時くらいに私のマンションに来てもらって、私が化粧と髪型をしたんだ」

京子はウィンクをしながら、上手く出来たという表情をしている。そういえば、よく見てみると紀美の化粧はいつもと違う。

本日の紀美は、茶色のジャケットにスキニージーンズで前に宏明のマンションに来た時に履いていたパンプスで、髪は三つ編みの入ったクラシカルなヘアでまとめている。

宏明は嬉しいはずなのに、何故か複雑な気分になってしまう。

「ヒロ、ノンちゃん可愛くなったでしょ？」

「あ、うん、まあ…」

紀美のイメチェンにどう答えていいのかわからないでいる宏明。

「みんな集まったところで、そろそろ行こうか」

辻井は全員の顔を見て言った。

待ち合わせ場所から少し歩いた通りに、桜が咲いている道がある。そこには、宏明達のように桜見物人がたくさん桜を見ている。

「うわー、桜って綺麗だね」

京子は桜を見ながら声を上げる。

「桜って毎年見ても飽きないよね」

紀美も京子と同じ気持ちで、桜を見ながら言う。

「ねえ、ノンちゃん一緒に写メ撮ろうよ」

京子はカバンからケータイを取り出しながら、紀美を誘う。

「うん、いいよ。宏君、撮ってよ」

「わかった。ケータイ貸せよ」

宏明は京子のケータイで桜をバックに紀美と京子を撮る。

「ありがとう。ノンちゃんのケータイに送るね」

京子はケータイの赤外線で、紀美のケータイに画像を送る。

いつもと違う紀美を見て、どうしても違和感を覚えてしまう宏明。見慣れないというのもある。だが、宏明にとっていつもの紀美のほうがいいと思うのは事実である。

「宏君、元気ないよ？」

紀美は宏明の顔をのぞきこむ。

「そうか？ そんなことないと思うけど…」

頭をかきながら答える宏明。

「ノンちゃんに見とれてたんだろ？」

松川は冗談っぽく言う。

「そんなんじゃないよ。別にオレは見とれてなんか…」

慌てて否定する宏明。

否定する宏明の答えに、紀美の胸はチクリと痛んだ。

「じゃあ、なんだよ？」

「何でもない。あ、桜のソフトクリームあるじゃん？ 食べようぜ

！」

宏明は自分の気持ちをごまかしながら、桜のソフトクリームの看板を指差した。

茂達と別れて、宏明は紀美と一緒にデートすることになった。二人きりになったのだが、宏明は紀美と口を開こうとしない。イメチェンした紀美とどう接していいのかわからない。今までとおりでいいのだ、と自分に言い聞かせてるが、どうもぎこちない自分になってしまう。紀美だっていつまでも同じでいられないと考えているのはわからなくもないが、宏明にとって今までどおりの紀美がいいとど

うしても思ってしまう。

「宏君、今日はどうしたの？」

二人は公園に來ると、ブランコに座った。そして、紀美から口を開いてくれた。

「今日の宏君は、私と全然喋ってくれないし、宏君が言った“別に見とれてなんかいない”っていう答えも傷付いたな。もしかして、私のこと……」

紀美の中に色んな不安がよぎる。

「何もないって……」

宏明はそんなつもりはないが、そっけなく答えてしまう。

「何もないわけないよ。今日の宏君変だもん」

泣きそうな声になる紀美。

「変って言われても……いつものオレだけど……」

困り果てた表情になる宏明。

「今日は会った時から様子が変わったもん。私のイメチェンがダメだった？ それならそうと言ってくれたら……」

紀美はブランコから立ち上がり、宏明の前まで来て言った。

今までにない真剣な紀美にあっけにとられてしまう。それに、今にも泣き出してしまいそうな声で言われてしまうと、自分の本音をいってしまわないといけないと覚悟した。

「オレは紀美がイメチェンした時、複雑だった。今までの紀美が好きなのに、変わっていく紀美が嫌だったのが、今のオレの本音だ。確かにイメチェンすることはいいことだし、イメチェンするなとは言わない。だけど、ホントのことを言うとおレはイメチェンする前の紀美が好きだ」

宏明は紀美がマンションに來た時から思っていた気持ち、紀美に素直に伝えた。

紀美は何も答えないままうつむいている。

「だからといって、紀美と別れるつもりはない」
一言はつきりと付け加えた。

「私ね、ずっとイメチェンしたいって思ってた。だけど、今までイメチェンする勇気がなかったの。そんな私がイメチェンしようって気になったのは、鍋パーティーの日よ。あの日、宏君と京ちゃんによそよそしい様子を見て、何かあったんだなって思った。あの日が私のイメチェンしたいっていう気持ちに火がついたんだ。今まで以上に宏君に好きになってもらいたいっていう気持ちが膨らんじやって…。付き合う前の宏君と京ちゃんの仲以上になりたいって思ってたから…」

半ば涙声の紀美。

「そうだったんか…。紀美の気持ちに気付かなくてスマン」

紀美の気持ちはわかったという口調になる。

「いいの、私だって言わなかったんだから…」

紀美は涙目を隠すように、宏明に背を向けてしまう。

二人の間に沈黙が流れる。紀美の気持ちを聞いた宏明の心は、ぽっかりと穴が空いたようだった。

「宏君、私達、当分会わないほうがいいと思うの」

まだ宏明に背を向けたまま提案する紀美。

一瞬、理解出来なかった宏明だが、

「わかった。紀美の気持ちがまとまったら言ってくれ。それまでオレは紀美のこと待ってる」

すぐに答えた。

四月に入って長い春休みが終わり、新学期が始まった。今日から宏明達は四回生になる。

あれから、宏明は紀美と会っていないし、メールもしていない。だけど、今日から新学期で会わないというほうが無理だ。授業が始まり、一緒のクラスだと嫌でも顔を合わせてしまう。恐らく、顔を合

わせても口は聞いてもらえないと思われる。

花見に行った夜から考え込む宏明で、紀美のイメチェンを素直に喜んでいたら：と思う自分がいた。喜んでいたら何か違っていたかもしれない。

ただ、イメチェンする前の紀美しか知らない宏明は、自分の知らない紀美を見たような気がした。そのうち、紀美が変わってしまったのではないかと思ってしまったのだ。

そして、このことは茂や京子達には言っていない。

「えーっ、ノンちゃんと会わない？」

京子は信じられないというふうな声をだす。

今日は午前中のオリエンテーションが終わってから、駅近くのレストランに茂と京子と三人でやって来た。席につくと、宏明は花見の後の出来事を話した。

「うん。紀美から会わないほうがいいって言われてな」

宏明はため息まじりで答えた。

「ノンちゃん、一言そんなこと言ってなかったよ？」

「多分、オレが言ってるだけでも思ったんだろうな」

「でも、会わないって言っても学校で会うじゃん？」

「まあな。学校で会っても口は聞いてはもらえねーと思うぜ」

参ったなという表情をする宏明は、今後どうするか考えていた。

――早いことなんとかしないと、自然消滅してしまう。

内心、焦りもあったが、焦っても仕方ないと思ってしまう。

「ノンちゃんのイメチェン、ヒロ的にはダメだった？」

京子は宏明の心境を気遣い、さりげなく聞いてみる。

「ダメってことはないけど、オレは今までの紀美が好きで付き合ってるから、見たことのない紀美を見てしまうと余計に知らない紀美に見えてしまうってわけだ」

宏明は頬づえをしながら、何か考え込むように答える。

「でも、紀美の気持ちもわからなくはないなって思う。やっぱり今

までの紀美がいいなんて思ってるオレの考えは古いかな。イメチェンした紀美を受け入れるべきかな」

二人に意見を求めるように言う。

「別にいいんじゃない？ ヒロはイメチェンする前のノンちゃんが好きなわけだし…。イメチェンしてもノンちゃんはノンちゃんだけどな」

「そうそう。中身は全く変わらないんだからね。決めるのはヒロだし、いつまでも口聞かないとかはダメだよ」

茂と京子は交互に返事する。

ありがとう、と言うと、宏明は長くて深いため息をついた。

新学期が始まり、十日が経った。未だに紀美とは学校では会うが、会話がまだなのである。

最初の一週間はなんとかなるかと思っていたが、十日も経つとだんだんと不安になってくる宏明の胸中は、なんとかしなくつはという思いだけが空回りしている。

このことは茂と京子だけが知っているのだが、二人で一緒にいることがないせいか、付き合っていることを知っている友人達からは「どうしたんだ？ 別れたのか？」といった心配する質問が、宏明に寄せられるのだ。そういう質問があると決まって、「別れていないし何でもないんだ。心配するな」と、強がって答えてしまう宏明だった。

本当のところ、心配どころかこのまま別れてしまうことになるのではないかと気が気ではない、というところが本音である。でも、紀美のことだから自然消滅なんてことはないだろう、きっと何か言ってくれるはずだ、と自分を納得させていた。

午前中の授業のオリエンテーションが終わると、宏明は一人で食堂

へと向かっていた。茂達男友達と食堂で昼食をする約束をしている。校舎を出ると、心地よい風が宏明の頬に吹き付ける。

中庭を抜けて、階段を昇ると食堂が見える。

宏明が食堂に入ろうとすると、

「宏君っ!!」

背後から聞き慣れた女性の声がした。

宏明にはその声の主が誰だか分かっていった。

振り向くと、イメチェンする前の紀美が立っていた。

「紀美…」

紀美の名前を呟くと、ホッとした表情を覗かせた宏明。

「イメチェンする前の私に戻っちゃった。無理にイメチェンすることないんだよね。私、色々考えてそう思った」

紀美は微笑みながら言った。

「そっか。オレも色々考えてた。このまま別れてしまうのだったな」

「迷惑かけてごめんね。でも、たまにはイメチェンしてもいいかな？」

紀美は謝りつつ、たまにイメチェンをしていいか承諾を得ようとする。

「全然いいよ。オレはわがまま言ったりして悪かった」

「いいの。突然、イメチェンした私が悪かったんだから…。ありがとう、宏君」

いつもより優しい笑顔の紀美は、なんだかいつもより輝いて見える。

「オイッ! ヒロ、何してんだよ?」

茂が声をかけてくる。

「茂、心配かけてごめんな!」

宏明は紀美と仲直りしたことをアピールした。

茂も二人の状況を把握し、わかったというふうになぜいた。

二人は茂のいるほうへと歩いていく。

これから先、長い旅路の中で色んなことがある。楽しいことや嬉し

いけとばかりじゃない。辛いことや嫌なことなどの困難も待ち構えている。だけど、みんなには乗り越えていける力がある。もちろん、オレにもその力はある。オレはオレなりに自分の人生を進んでいく。
——自分の見つめる先にあるのは…。

見つめる先にあるのは…（後書き）

今回は宏明の想いや気持ちを書いてみました。書いていて、ここはどうしよう、どうしたら上手く伝えられるだろう、と色々悩みながら書いていたので、納得しない点多々あるとは思いますが、最初から最後まで読んでもらえて有り難い思いでいっぱいです。この作品を読んで、何か一つでも感じ取ってもらえたら嬉しいな、と思っています。そして、宏明だけではなく紀美達の気持ちにもなって読んで欲しいなと思います。本当に最後まで読んでいただいとて嬉しく思います。長々となりましたが、読んでいただいてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7174d/>

見つめる先にあるのは…

2011年4月24日15時03分発行